

## 2. 加西市の歴史文化

### 2-1. 加西市の歴史文化の成り立ち

#### (1) 社会環境

##### ア 位置

加西市は、兵庫県の南部、播州平野のほぼ中央に位置し、東は小野市および加東市に、西は姫路市および福崎町に、南は加古川市に、そして北は西脇市、多可町および市川町にそれぞれ隣接する。市域面積は 150.22 km<sup>2</sup>で、兵庫県の約 1.8%を占めており、東西 12.4 km、南北 19.8 km の広がりを有する。(図 2-1 参照)

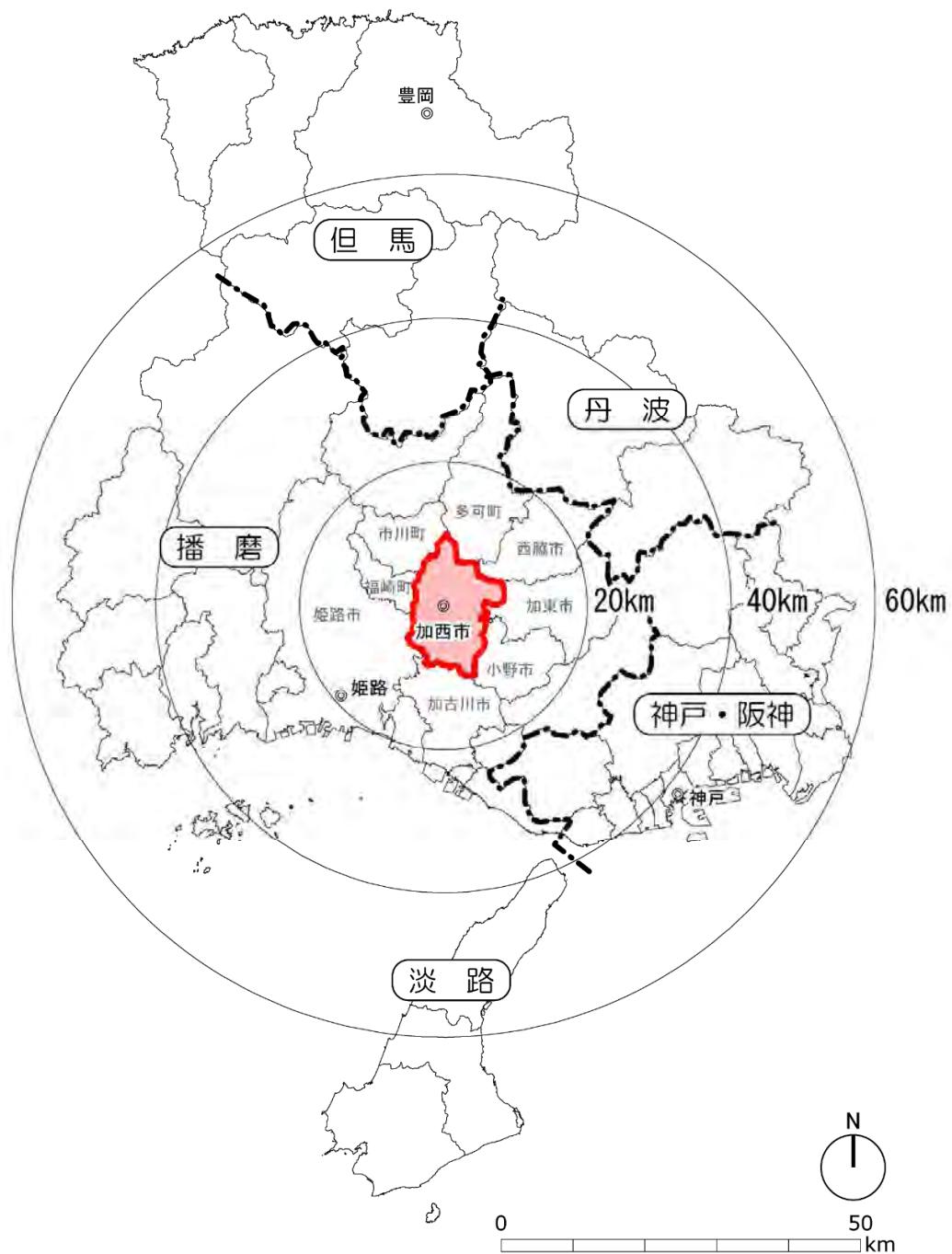


図 2-1 加西市の位置

## イ 人口・世帯数等

加西市の人口は、近年減少を続けており、平成 22 年（2010）から平成 27 年（2015）の 5 年間で、3,680 人（増減率 7.7%）減少して 44,313 人となっている。一方、世帯数はゆるやかに増加し続けており、核家族や単身家族の増加がうかがえる。（図 2-2 参照）

地区別人口をみると、平成 27 年（2015）時点で本市の中心市街地を含む北条地区がもっとも多く 13,188 人となっている。いずれの地区も人口並びに 1 世帯当たりの人員数は減少している。中でも、北条地区は、世帯数の増加率が高く、核家族化等の傾向が顕著である。一方、市域北部の多加野地区、西在田地区、在田地区並びに市域南西部の賀茂地区、下里地区といった山林が多くを占める地区では、人口・世帯数ともに減少割合が大きくなっている。（表 2-1 参照）

年齢別の人口では、年少人口（15 歳未満）及び生産年齢人口（15~64 歳）の割合が減少する一方、老人人口（65 歳以上）の割合が増加し続け、平成 27 年（2015）には、高齢化率 30.5% となっている。（図 2-3 参照）

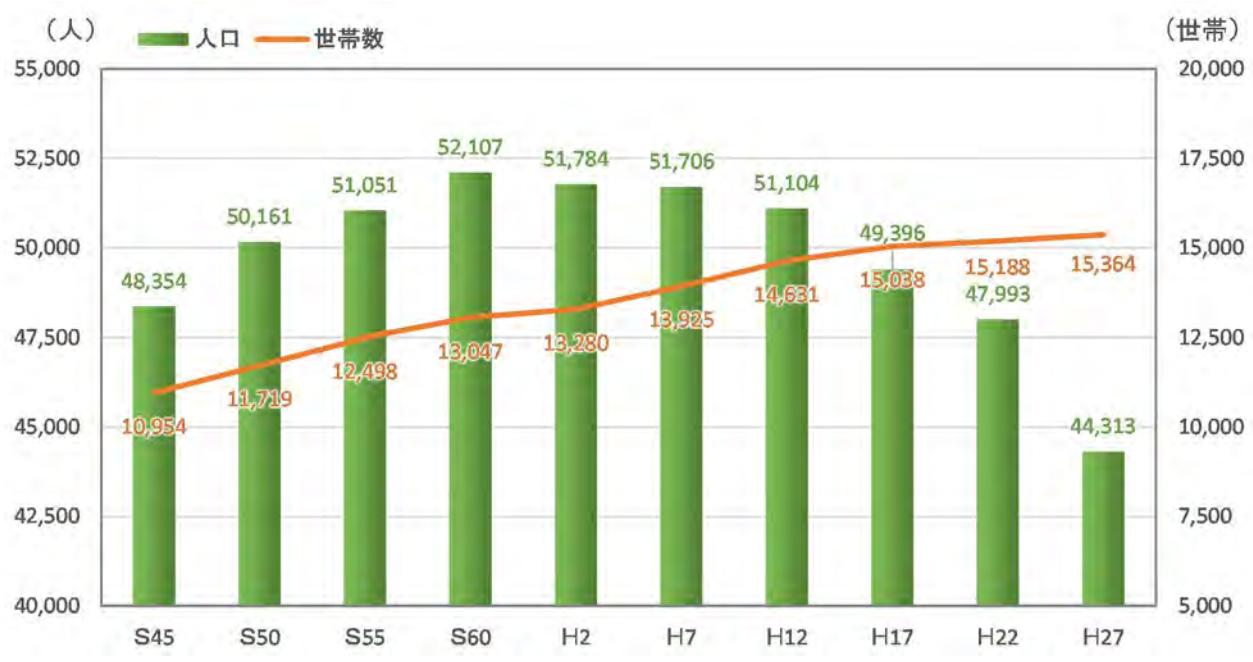


図 2-2 人口・世帯数の推移 （「国勢調査結果」（総務省統計局）より作成 ※各年 10 月 1 日現在）

表 2-1 地区別の人口・世帯数の推移 （「国勢調査結果」（総務省統計局）より作成 ※各年 10 月 1 日現在）

地区名	人口(人)			世帯数(世帯)			世帯規模(人/世帯)	
	平成 22 年	平成 27 年	増減率(%)	平成 22 年	平成 27 年	増減率(%)	平成 22 年	平成 27 年
北条地区	13,614	13,188	▲3.1	5,036	5,406	7.3	2.7	2.4
富田地区	3,373	3,121	▲7.5	1,069	1,069	0.0	3.2	2.9
賀茂地区	3,528	3,124	▲11.5	1,054	1,043	▲1.0	3.4	3.0
下里地区	5,419	4,800	▲11.4	1,542	1,460	▲5.3	3.4	3.3
九会地区	6,554	6,189	▲5.6	2,060	2,076	0.8	3.2	3.0
富合地区	4,094	3,734	▲8.8	1,178	1,177	▲0.1	3.5	3.2
多加野地区	4,860	4,356	▲10.4	1,316	1,293	▲1.7	3.7	3.4
西在田地区	2,398	2,142	▲10.7	693	650	▲6.2	3.5	3.3
在田地区	4,153	3,659	▲11.9	1,240	1,190	▲4.0	3.4	3.1
総数	47,993	44,313	▲7.7	15,188	15,364	1.2	3.2	2.9



図 2-3 年齢別人口の推移 (「国勢調査結果」(総務省統計局) より作成 ※各年 10月 1日現在)

#### ウ 行政単位の変遷と集落

明治 22 年 (1889) に市町村制施行によって、加西郡は、北条町、富田村、賀茂村、下里村、九会村、富合村、多加野村、芳田村、大和村、西在田村、在田村の 1 町 10 村に再編成された。町村合併促進法制定後の昭和 29 年 (1954) に、芳田村は西脇市、大和村は八千代町に合併した後、昭和 30 年 (1955) 1 月 15 日に、北条町、富田村、賀茂村、下里村の 1 町 3 村が合併し北条町となり、次いで、3 月 1 日には多加野村、西在田村、在田村の 3 村が合併して泉町となり、3 月 30 日には九会村、富合村の 2 村が合併し加西町となった。そして、昭和 42 年 (1967) 4 月 1 日に、北条町、泉町、加西町の 3 町が合併し、加西市が誕生、兵庫県下で 21 番目に市制を施行し、現在に至る。(表 2-2、図 2-4 参照)

表 2-2 行政単位の変遷

明治 22 年 (1889)		昭和 30 年 (1955)	昭和 42 年 ~ 現在 (1967)
加西郡	北条町	北条町	北条地区
	富田村		富田地区
	賀茂村		賀茂地区
	下里村		下里地区
	九会村		九会地区
	富合村	加西町	富合地区
	多加野村		多加野地区
	西在田村		西在田地区
	在田村		在田地区
	芳田村	※ 昭和 29 年 (1954) に西脇市に合併	
	大和村	※ 昭和 29 年 (1954) に八千代町 (現 多可町) に合併	



図 2-4 昭和 30 年の町域と現在の地区

## 工 土地利用

加西市の土地利用特性は、北条地区を中心とした一部市街地を除いて、市域の大半が農村的な土地利用形態を有している。市域の28%を占める山林が北部山岳地帯を形成し、26%（うち田 23%、畑 3%）を占める農用地については、土地基盤整備が進み優良農地の維持・保全が図られている。また、宅地は8%であるほか、その他（公園、ゴルフ場、未利用地等）も34%と多くなっている。（図2-5、図2-6参照）

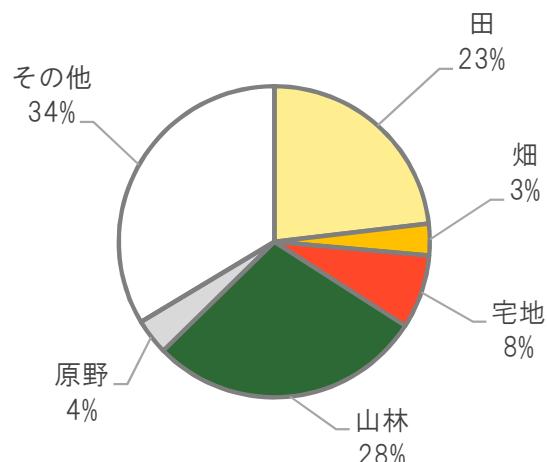


図2-5 地目別面積の割合（平成28年）

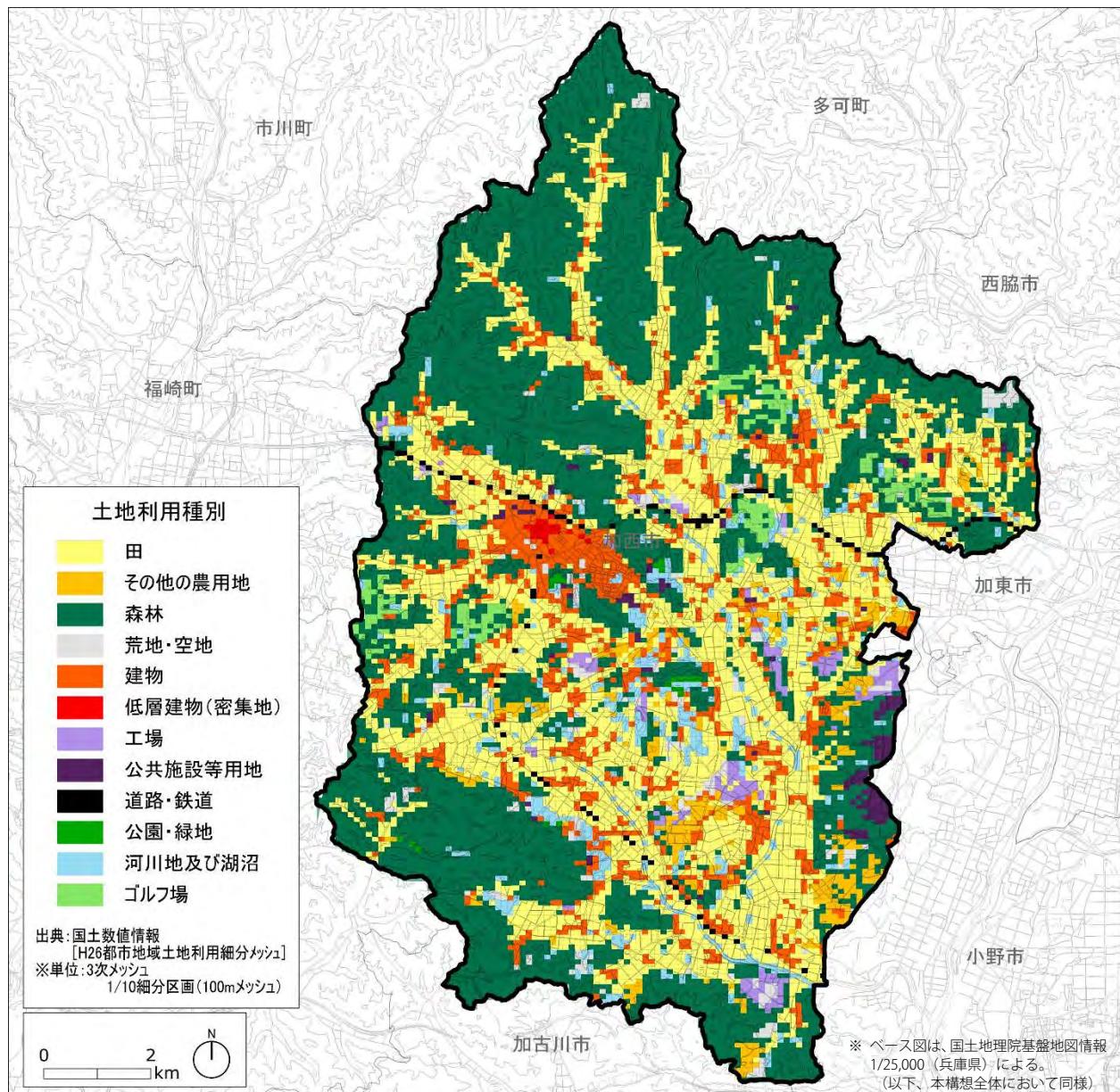


図2-6 土地利用

## 才 産業

加西市の主要な産業は、製造業、農業を中心とした「ものづくり」である。加西市は、戦後、三洋電機が発祥し、関連した地場の産業が興ってきた。それにより製造業が盛んになり、当時からの協力企業が独自の発展を遂げ、高い技術力や蓄積されたノウハウを持つ企業が集積し、市内経済や雇用を牽引する産業となっている。また、気候条件がよく、広大で優良な農地が広がる本市では、農業も盛んであり、米、トマトなどの野菜、ブドウやイチゴなどの果樹、花卉などを産している。農業関係の教育・研究機関も集積し、平成27年（2015）からは、トマト栽培でオランダ型の次世代施設園芸事業を開始するなど、地域に根ざした新しい農業の創造に取り組んでいる。

平成26年度の市内総生産の構成をみると、製造業の割合が圧倒的に高く、市内総生産の44.9%を占める。次いで、サービス業16.0%、運輸業10.0%、卸売・小売業7.3%、不動産業6.7%の順となっている。（図2-7参照）

### 平成27年（2015）の産業別就業者

数比率は、第3次産業が53.2%、第2次産業が42.9%であり、第2次・第3次産業が大半を占め、第1次産業は3.9%とわずかである。（図2-8参照）

平成27年（2015）の「農林業センサス」によれば、加西市の農家数は3,288戸で、そのうち自給的農家が1,052戸、販売農家が2,236戸である。また販売農家については、専業農家が381戸、第1種兼業農家が173戸、第2種兼業農家が1,682戸であり、経営規模別では、0.5ha未満は532戸、0.5～1.0haは1,044戸、1.0～2.0haは508戸、2.0～3.0haは78戸、3.0ha以上は74戸となっている。農業経営体による販売目的の作物別作付面積は、水稻が1,639haと最も多く、豆類35ha、露地の野菜類31haと続いている。一方、林業経営体は23経営体で、うち法人化しているものが5経営体、法人化していないものが18経営体である。

加西市内の観光入込客数は、平成28年度で871,126人である。平成25年度に根日女の湯（民間施設）が閉鎖したことで、平成26年度の観光入込客数は減少したが、平成27年（2015）は再び増加し、全体としては微増傾向にある。最も入込客数が多い施設は、兵庫県立フラワーセンターで年間20万人を超える。同敷地内には、平成29年（2017）4月に、古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）が開館し、入込客数のさらなる増加が期待されている。（表2-3、図2-9参照）

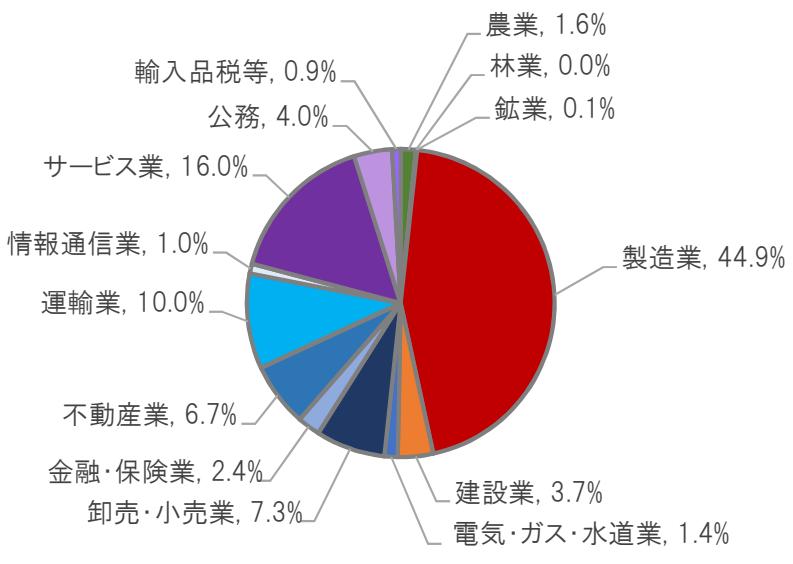
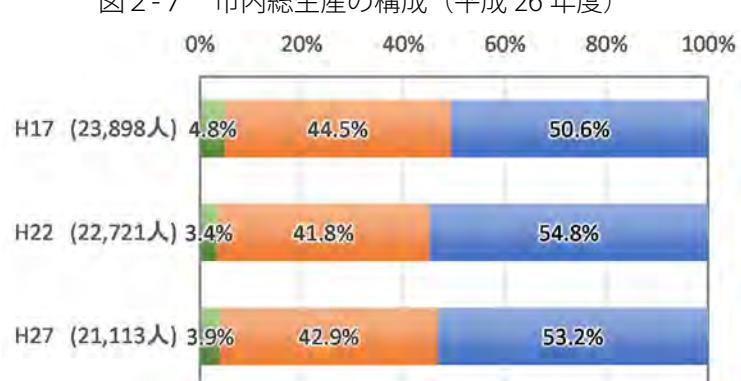


図2-7 市内総生産の構成（平成26年度）



※( )は15歳以上就業者数

※分類不能を除く15歳以上就業者数に対する割合とする

■第1次産業 ■第2次産業 ■第3次産業

（国勢調査結果）（総務省統計局）より作成 ※各年10月1日現在

図2-8 産業別就業者数比率の推移

表 2-3 観光入込客数の推移 (「加西市産業振興計画（平成 28 年度）」より作成) (単位：人／年)

主な観光地点等	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
法華山一乗寺	95,000	95,000	79,000	45,214	45,501	43,859
五百羅漢	10,266	8,855	8,579	11,037	10,478	10,202
玉丘史跡公園	29,740	34,230	30,257	35,458	48,780	31,553
根日女の湯	98,893	93,602	47,701	—	—	—
いこいの村はりま	59,197	50,564	50,908	51,019	54,586	55,862
兵庫県立フラワーセンター	168,961	193,552	223,496	225,057	213,819	225,672
丸山総合公園	21,716	23,225	20,282	19,039	16,492	22,858
古法華自然公園	42,760	46,980	34,840	48,086	68,115	62,646
NPO法人原始人の会 都市農村交流施設	7,285	9,897	10,866	10,455	13,839	16,776
青野運動公苑	72,926	69,987	69,797	70,390	67,621	68,138
勤労者体育センター	—	—	69,069	84,629	79,118	83,896
加西カントリークラブ	55,465	57,532	59,081	51,438	56,681	56,897
タカガワオーセントゴルフ俱楽部	45,550	43,684	39,164	42,213	45,423	42,149
播州東洋ゴルフ俱楽部	26,186	31,269	40,519	40,868	43,610	45,716
加西インターナショナルカントリークラブ	25,893	25,126	24,675	38,307	29,697	25,902
北条節句まつり	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
かさい夏彩夢フェスタ（～H24）	29,000	30,000	23,000	16,000	25,000	25,000
加西サイサイまつり（H25～）	—	—	—	—	—	—
北条の宿はくらんかい	18,000	15,000	25,000	28,000	25,000	15,000
グリーンパークトライアスロン	5,000	—	—	—	—	—
じば産物展	—	—	8,000	6,500	8,800	9,000
播磨国風土記 1300 年祭	—	—	—	—	14,500	—
合計	841,838	858,503	894,234	853,710	897,060	871,126

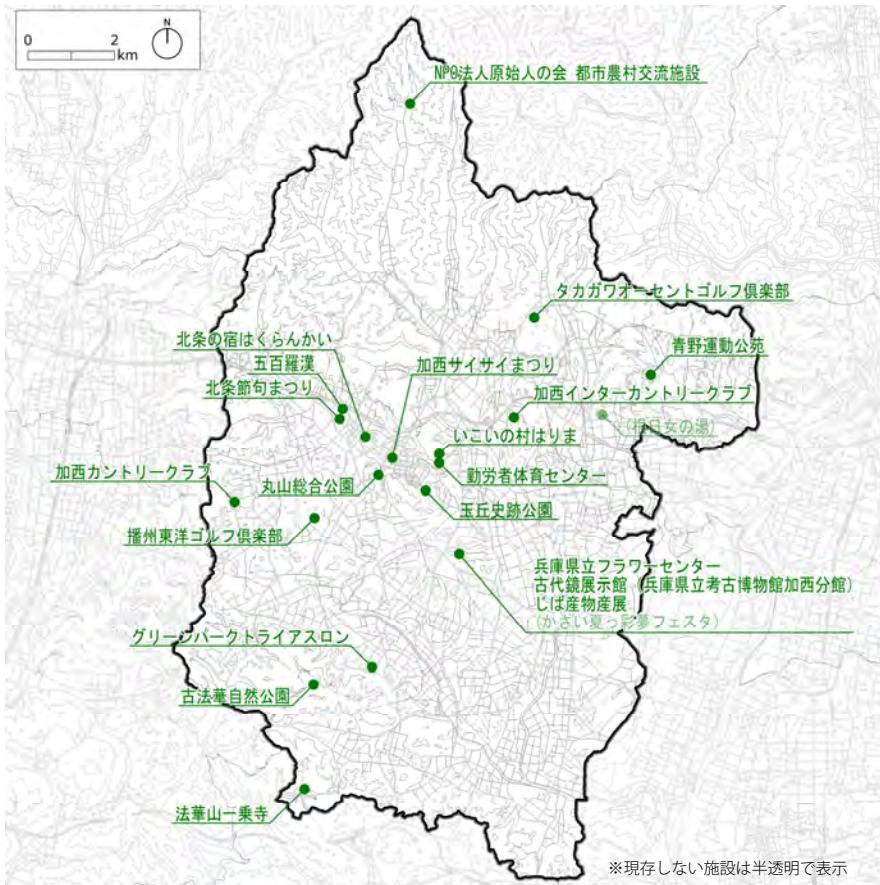


図 2-9 主な観光施設の分布



加西サイサイまつり



(出典：兵庫県立フラワーセンターホームページ)  
兵庫県立フラワーセンター



古法華自然公園

## 力 交通網

中国自動車道が市内のほぼ中央を東西に横断する形で走り、加西インターチェンジが市のほぼ中央に整備されている。また、市の南端をかすめるかたちで山陽自動車道が走り、加古川北インターチェンジが位置している。これら 2 つのインターチェンジを有することで、市内の産業団地には、製造業を中心とする数多くの企業が進出している。

また、市内の道路網は、姫路市から京都を結ぶ国道 372 号や加西の中心市街地を走る主要地方道三木宍粟線等があり、近隣地域とのアクセスも充実している。これらの国道や主要地方道の多くは、近世の街道や古道を概ね踏襲した道筋である。一方、北条鉄道が市内を運行しており、北条町駅から JR 加古川線と連絡する栗生駅（小野市）までを 20 分程度で結び、北条町駅から JR 加古川駅へは 50 分程度となっている。（図 2-10 参照）

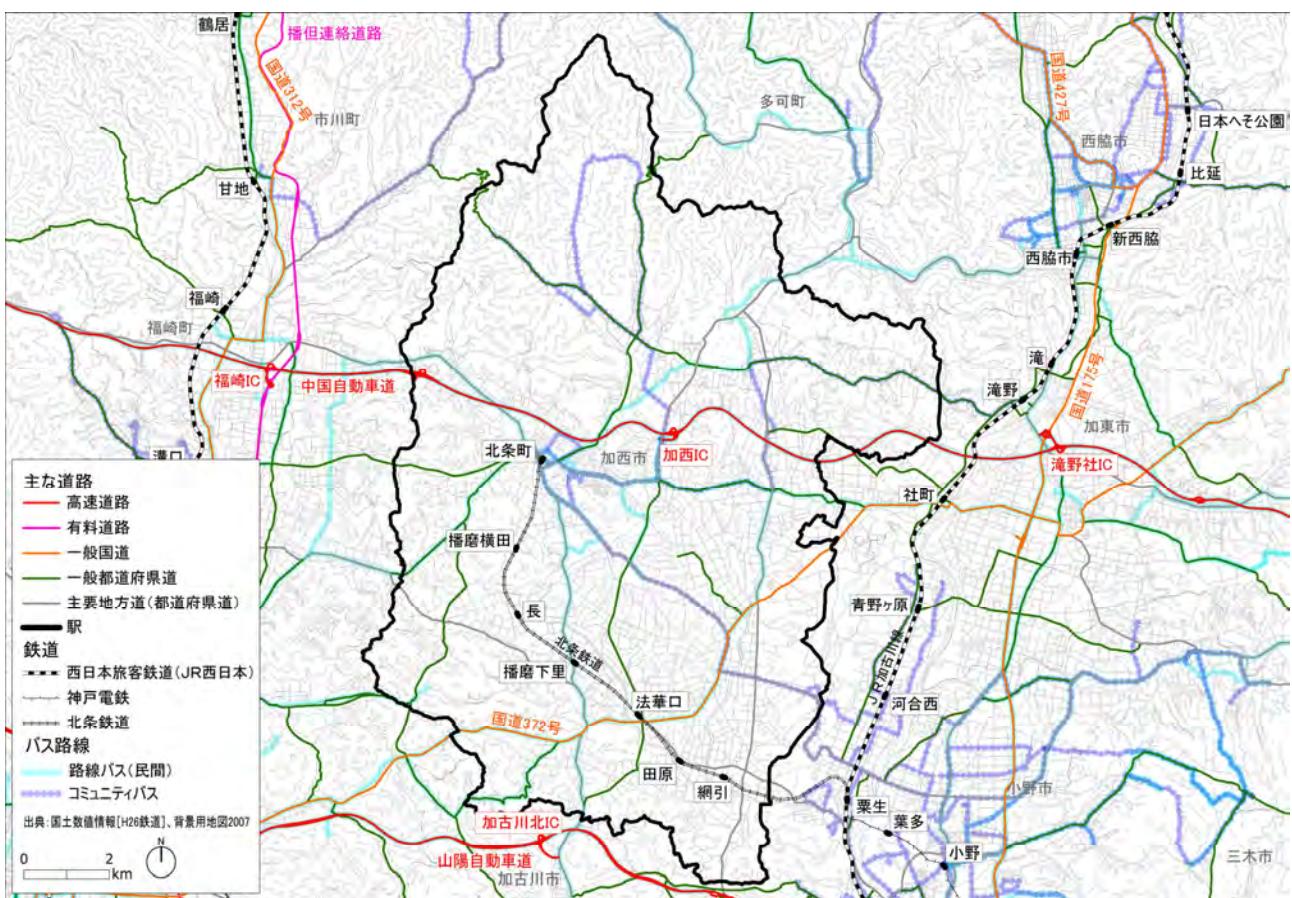


図 2-10 主要交通網

## キ 法規制等

加西市では、行政区域 ( $150.22 \text{ km}^2$ ) のうち、南側の  $118.0 \text{ km}^2$  が都市計画区域に指定されており、そのうち、 $5.0 \text{ km}^2$  が市街化区域、 $113.0 \text{ km}^2$  が市街化調整区域に指定されている。加西市の DID（人口集中地区）を中心とした中心市街地以外では、中野町と 4 つの産業団地（加西工業団地、鎮岩工業団地、加西東産業団地、加西南産業団地）が市街化区域に指定されており、中野町では住居系の用途地域、産業団地では工業系の用途地域が指定されている。また、「北条町駅西部地区」「加西南産業団地」「加西東産業団地」「鎮岩工業団地」「中野地区」「玉丘地区」「横尾地区」「西高室地区」「下宮木町南部産業集積地区」の計 9 地区で地区計画が決定されている。

一方、都市計画区域外については、「緑豊かな地域環境の形成に関する条例（緑条例）」（兵庫県）に基

づき、平成 17 年（2005）より環境形成区域が指定され、適切な土地利用の推進や森林・緑地の保全の観点からの開発行為の誘導等によって、緑豊かな地域環境の形成を図っている。（図 2-11 参照）

「農業振興地域の整備に関する法律」では、下里川や万願寺川等河川沿い、谷筋を中心に農業振興地域及び農用地区域が指定されている。（図 2-12 参照）

「森林法」では、森林の大半にあたる 6,346ha が地域森林計画対象民有林であり、国有林はわずか 1ha にとどまる。また、保安林は 1,567ha に指定されており、森林面積の 24.9% を占める。（図 2-13 参照）

自然公園では、「兵庫県立自然公園条例」に基づく自然公園として、市域南部に「播磨中部丘陵県立自然公園」が指定されている。法華山一乗寺境内及びその周辺には、スギ・ヒノキ・マツ・シイ等の社叢林が静寂な境地を形成している。（図 2-14 参照）

また、「環境の保全と創造に関する条例」（兵庫県）に基づき、「普光寺」の 1 地区に兵庫県自然環境保全地域が、「鳥獣保護法」に基づき「北条」「加西市一乗寺」の 2 地区に鳥獣保護区が指定されている。

景観行政では、「景観の形成等に関する条例」（兵庫県）に基づき、加西市北条町北条、北条町栗田、北条町横尾、北条町小谷、北条町古坂の各一部を含む約 45ha の地域が、北条地区歴史的景観形成地区に指定され、地域の特性に応じたきめ細かな景観誘導が図られている。（図 2-15 参照）

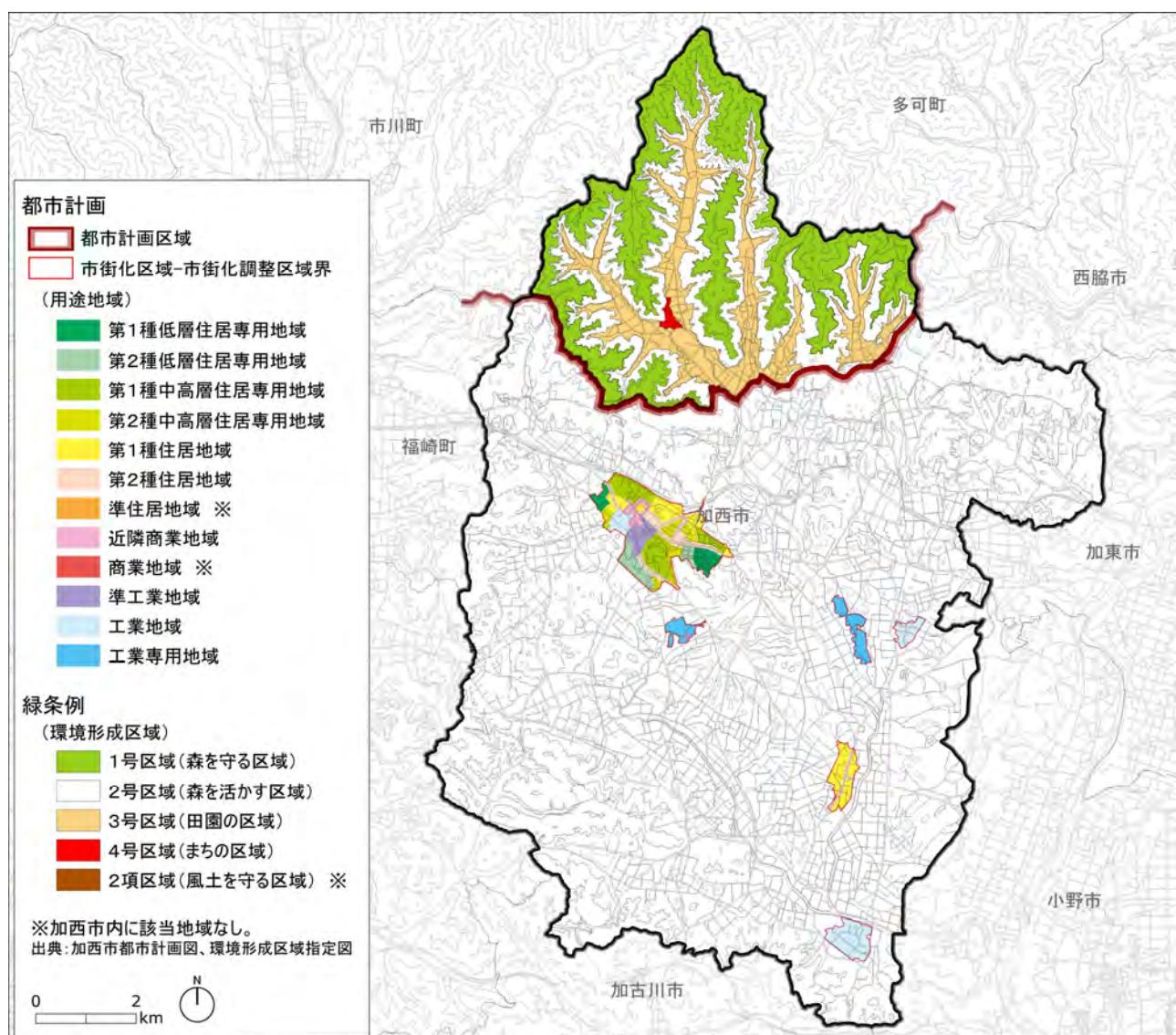


図 2-11 都市計画法及び緑条例に基づく区域指定

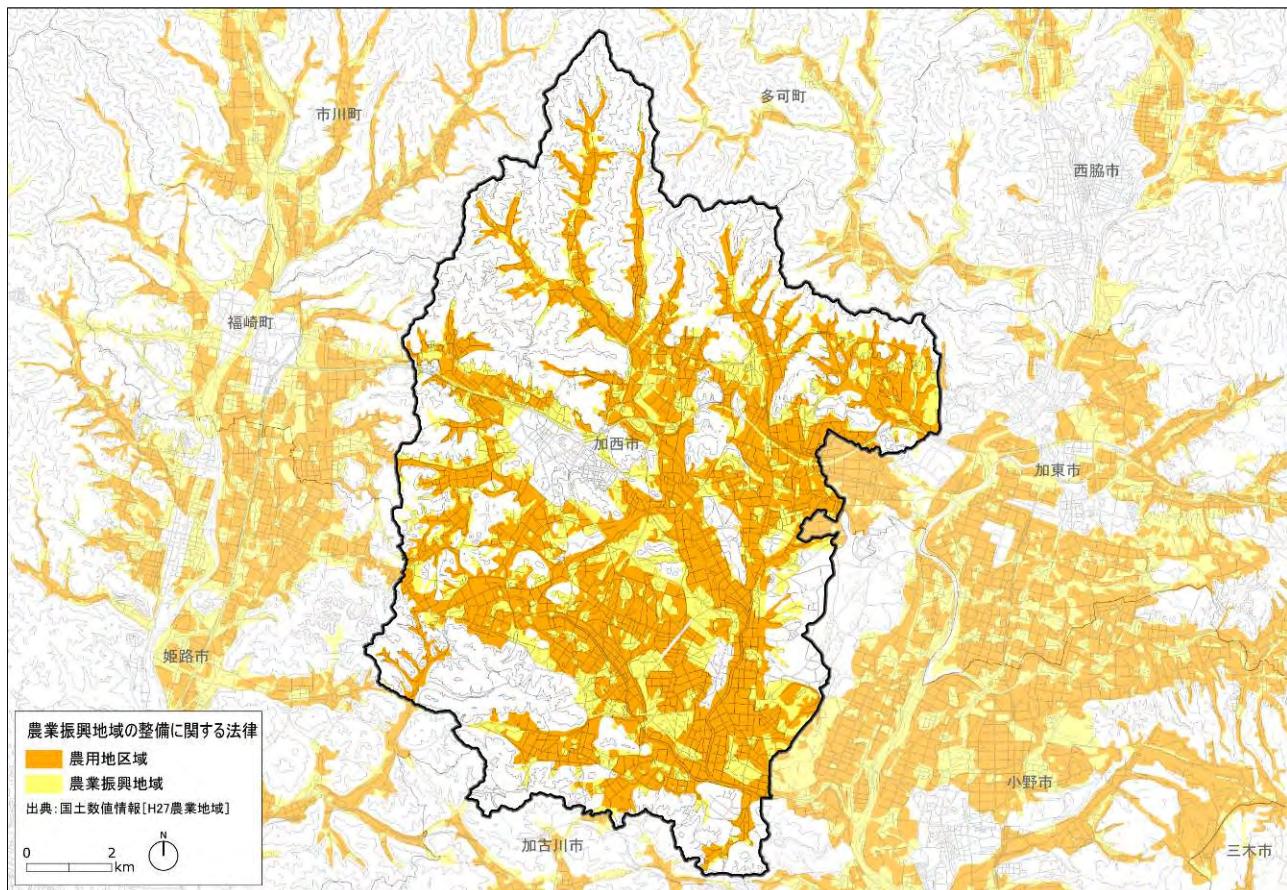


図 2-12 農業振興地域の整備に関する法律に基づく区域指定

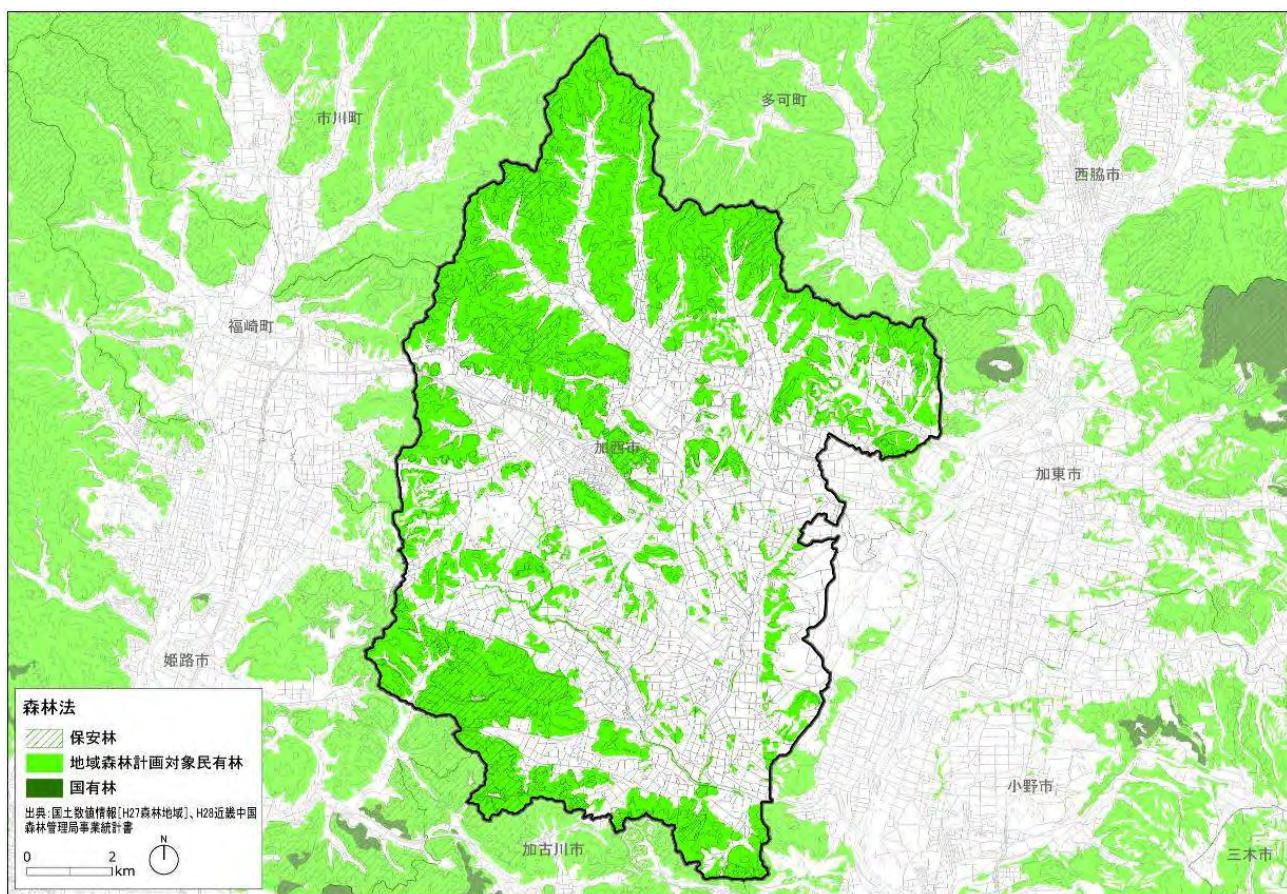


図 2-13 森林法に基づく区域指定

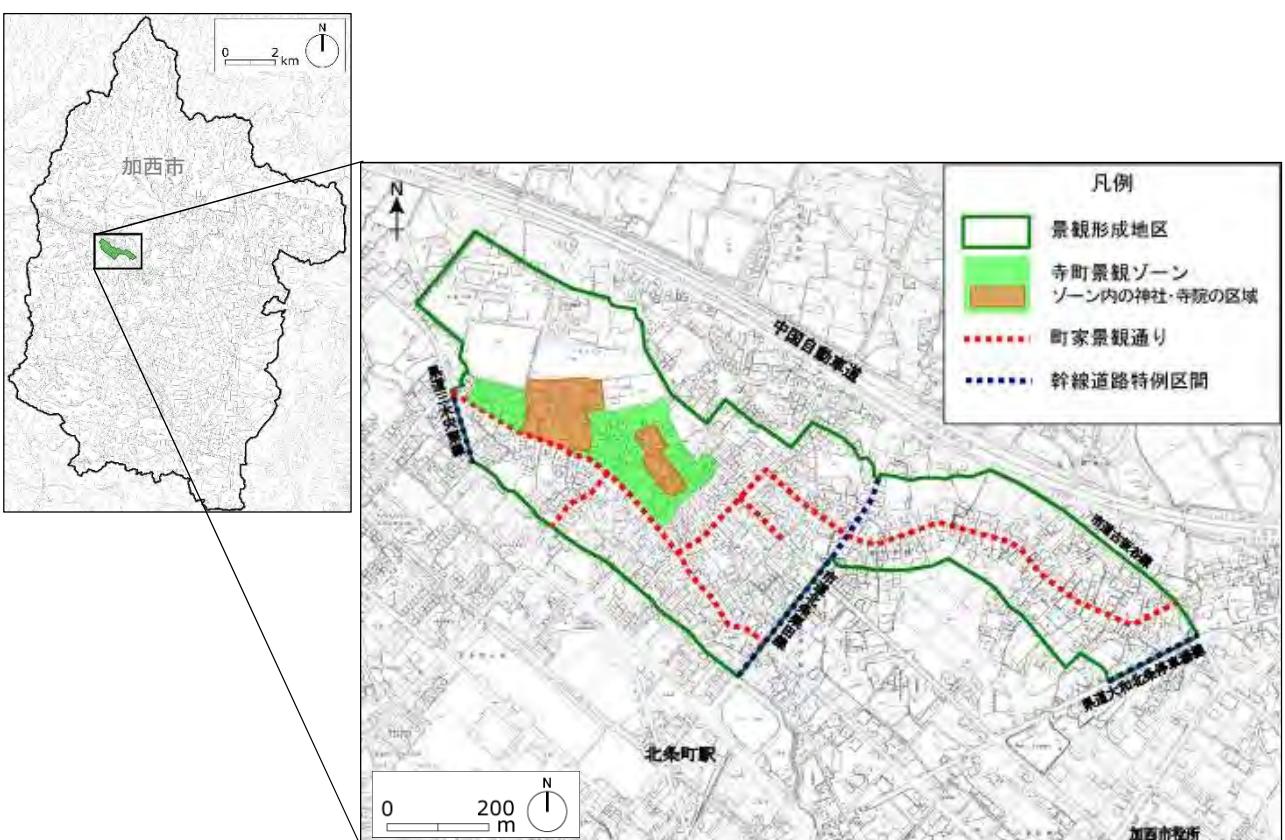
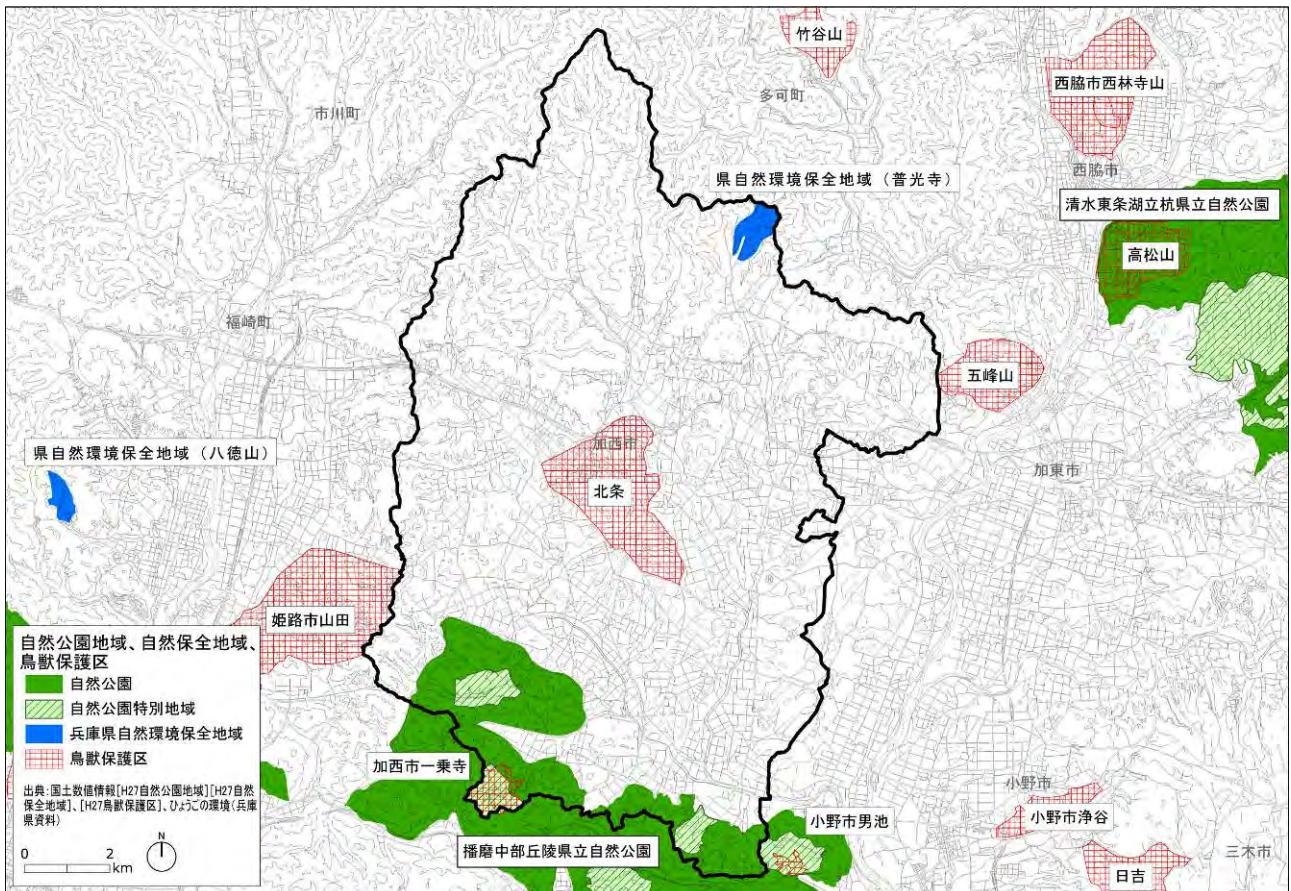


図2-15 景観の形成等に関する条例（兵庫県）に基づく加西市北条地区歴史的景観形成地区的指定

## (2) 自然環境

### ア 地勢

加西市は、北部に中国山地東端南縁の裾野を形成する海拔300～500mの山地、西部から南部に中生代の火山活動で形成された凝灰岩類、流紋岩類を母岩とする海拔200～250mの法華山地が連なり、それらに囲まれるかたちで広い丘陵・段丘地形が続いている。市域を南流する普光寺川、万願寺川、下里川の3河川は、丘陵・段丘面を刻み沖積低地を形成しながら万願寺川に合流し、さらに加古川に合流している。このような段丘面の多い地形では、環境の良い湿地が作られやすく、本市に見られる多くの豊かな湿地の基礎となっている。万願寺川の東側には広大な青野ヶ原台地が、西側には鶴野台地が広がり、播磨内陸地域最大の平坦地を形成している。この一帯は、ため池が多く、県下でも有数の密集地帯である。兵庫県ため池台帳に記載されている市域のため池数は642であるが、小さなものも含めると900を超えるとも言われている。(図2-16参照)

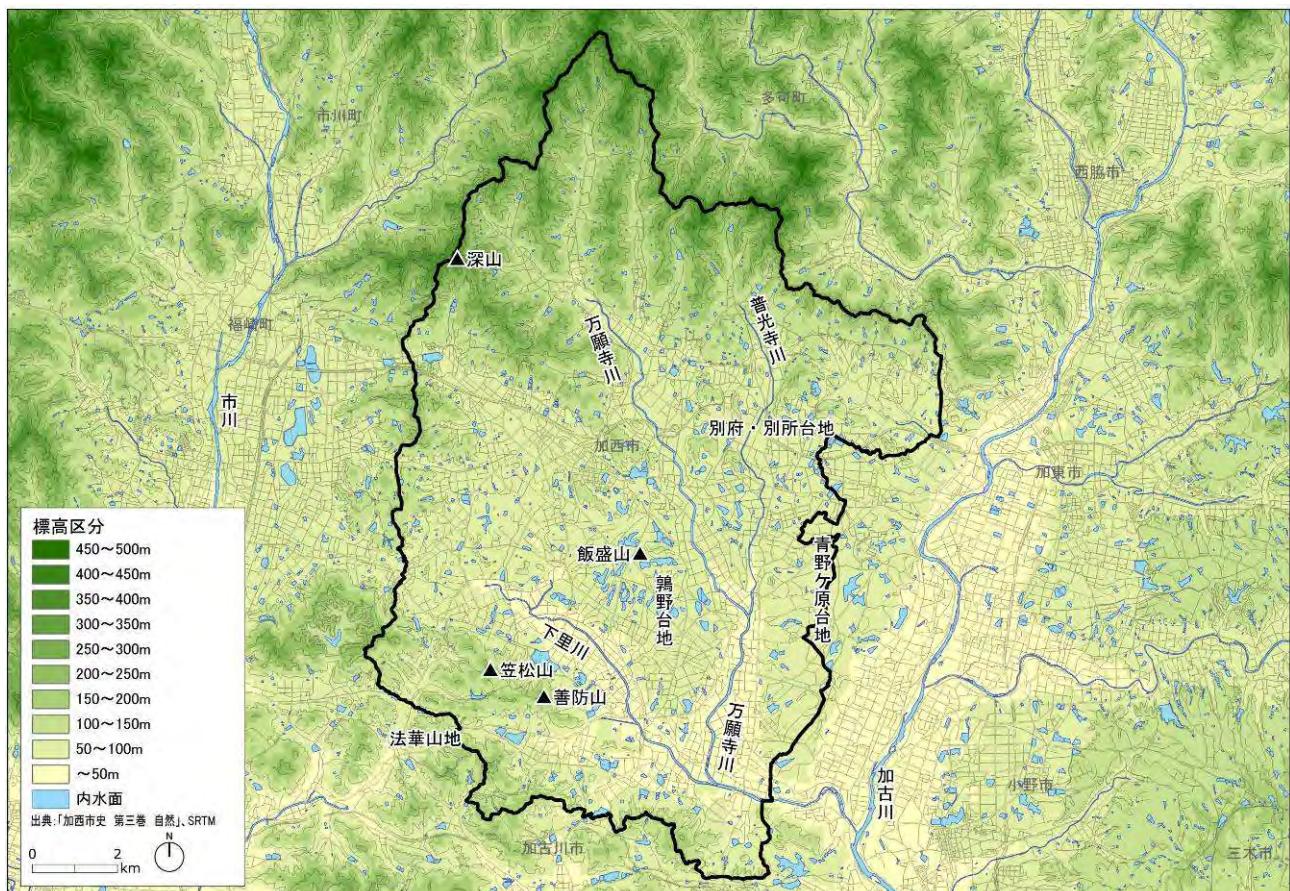


図2-16 地勢

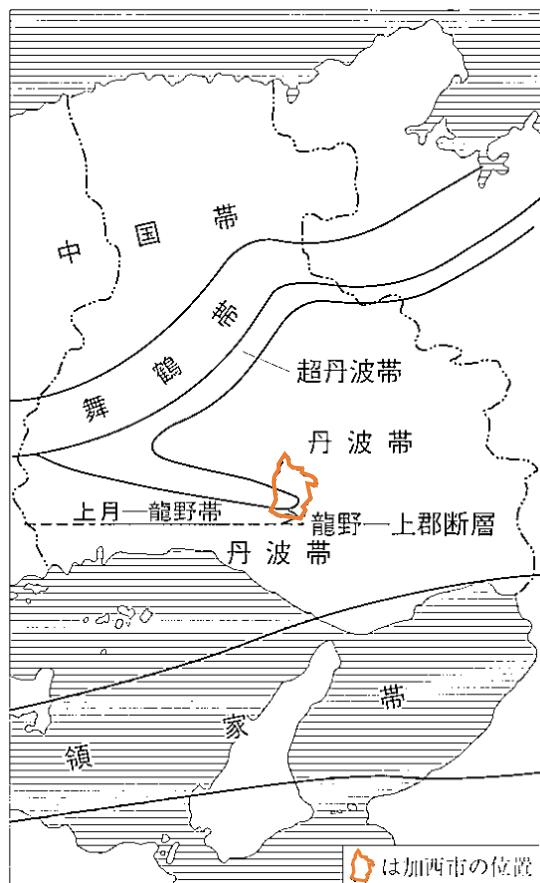
### イ 地質

加西市は、丹波帯、超丹波帯、上月-龍野帯の3つの地質構造帯にまたがって位置する。市域の大部分を占める丹波帯は、中生代ジュラ紀(1億9,960万年前～1億4,550万年前)に形成された付加体からなる地層群で、北は上万願寺町から南は北条町まで、西は福居町、畠町から東は国正町まで分布する。その南に断層を挟んで分布する超丹波帯は、丹波帯より古い古生代二畳紀(2億8,900万年前～2億4,700万年前)に形成された地層群で、一部に付加体の要素を持つ。市域最南端の中山町や大柳町が属す上月-龍野帯は、古生代石炭紀(3億5,920万年前～2億9,900万年前)～古生代二畳紀の地層群や岩石から構成され、西剣坂町や東剣坂町を通る断層により、超丹波層と接している。このように市域では、

北から南に3つの構造体が配列し、その形成年代も北から南へと古くなっている。(図2-17、図2-18参照)

市域東部に見られる第四紀(258万8,000年前～現在)の堆積物である大阪層群は、粘土質で適度に水が溜まり、染み出すことから、段丘面の多い地形と相まって、加西のため池・湿地の多さに関係していると考えられている。

加西市は、岡山県東部から兵庫県南東部にかけて分布する活断層帯である山崎断層帯に位置する。山崎断層帯は、那岐山断層帯(岡山県吉田郡鏡野町から岡山県勝田郡奈義町に至る東西方向の約32km)、山崎断層帯主部(岡山県美作市から三木市に至る西北西～東南東方向の約79km)、草谷断層(三木市から加古川市に至る東北東～西南西方向の約13km)の3つの断層に区分され、加西市は山崎断層帯主部の南東部に位置している。山崎断層帯主部北西部(活動周期：2千年前後)は、貞觀10年(868)にマグニチュード7.1の「播磨地震」を起こしたことが知られる。一方、山崎断層帯南東部(活動周期：3千程度)は、播磨地震よりも古い2千年前頃に最新の大地震を起こしたと推測されている。兵庫県による山崎断層帯地震が発生した場合の加西市の被害想定は、最大震度7、建物の



(出典：「加西市史 第三巻」)  
図2-17 兵庫県の地質構造区分の概念図

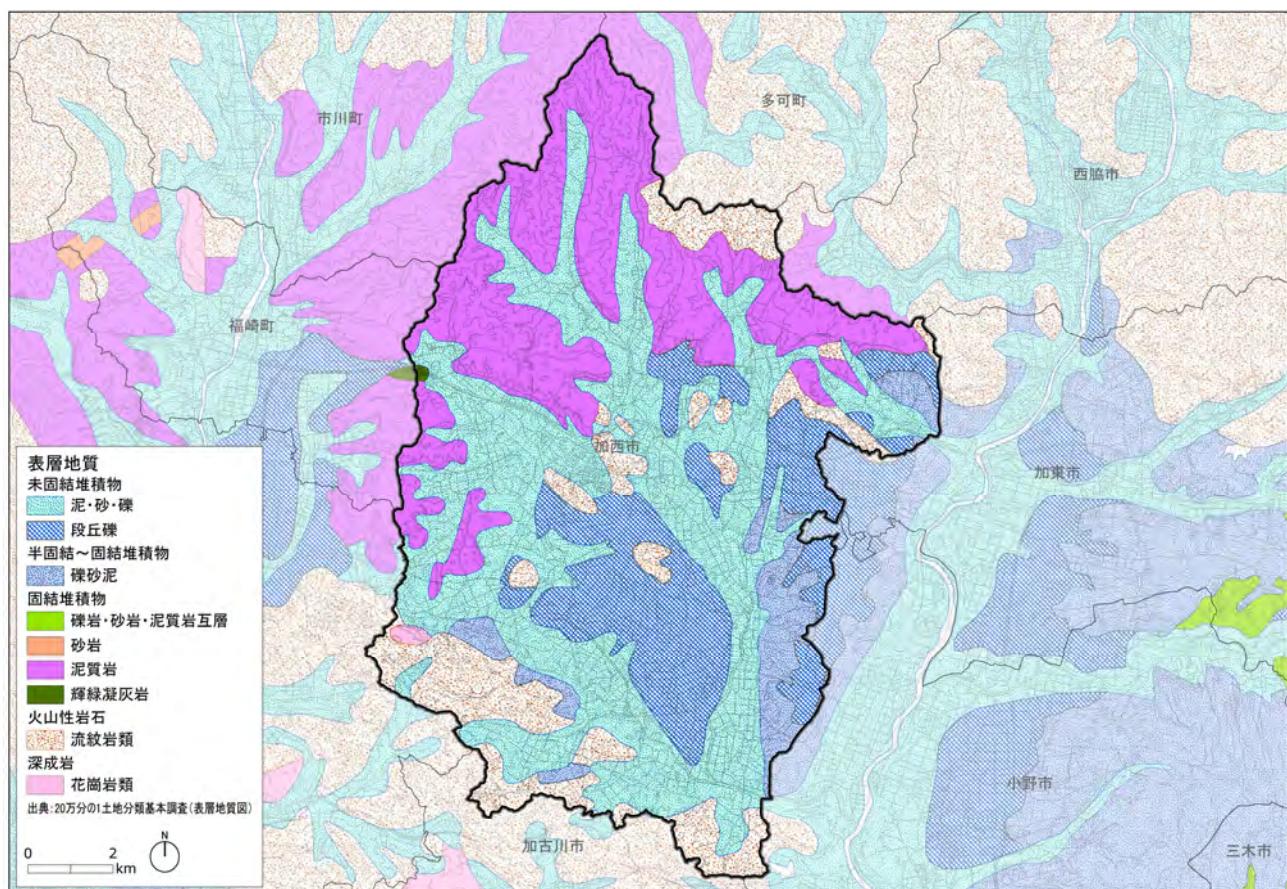


図2-18 表層地質

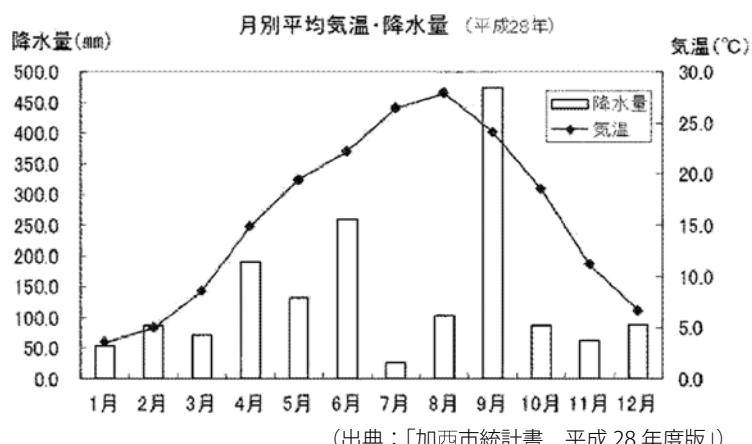
全・半壊数約 12,500 棟、死者約 300 人、負傷者約 1,100 人、避難者数約 12,000 人と予想されている（いずれも最大時。『平成 29 年度加西市地域防災計画（震災対策計画編）』による）。

## ウ 気候

加西市の気候は、瀬戸内式に属し、冬期の降水量が少なく、年間総雨量は 1,400 mm 前後で、平均気温は 15°C 前後と温暖である。（図 2-19 参照）

市域では大型台風などによる被害は経験しているが、大規模水害等は発生していない。一方、天候不良による加西郡最後の飢饉が、明治 16～19 年（1883～1886）にかけて発生している。これは 16 年の旱魃、17 年の長雨と 2 年にわたる天候不良により生じたものである。また、昭和 8 年

（1933）6 月 14 日に加西郡中央部で拳大の降雹があり、建物倒壊・耕作地被害など大きな被害が発生している。



（出典：「加西市統計書 平成 28 年度版」）

図 2-19 加西市の月別平均気温・降水量（平成 28 年）

## エ 生態系

### ① 植生区分（図 2-20 参照）

#### ○ 自然植生

環境省による植生調査（第 6・7 回自然環境保全基礎調査）によると、自然植生として広く分布しているのはカナメモチーコジイ群集である。カナメモチーコジイ群集は、花崗岩基盤地を主とする乾性立地に成立する常緑広葉樹林であり、コジイが優占し、カナメモチ、ナナメノキ等によって区分される。この群落は、人間の影響を受ける以前、本地域の大部分に成立していたと考えられ、市内北東部の山裾には多く見られる。内北部の河内町の標高 240m 前後の普光寺裏山や、南部の坂本町にある法華山一乗寺のコジイ林が、貴重な群落として残されている。またアカマツ群落は、南西部の古法華周辺の山地に広くみられる。度重なる伐採や山火事により本来の植生が破壊され、表土流出により岩盤が露出し、日差しが強く乾燥が激しい条件のため、アカマツをはじめとする高木の生育は悪く、疎林となっている。

河辺・湿原植生を見ると、市内には多くのため池が存在していることから、ヒルムシロクラスの浮遊植物群落（ヒシ、オニビシ、ヒルムシロ等）が発達している。その他の河辺植生としては、ヨシクラス（ヨシ、マコモ、ヒメガマ、カンガレイ等）の分布がみられる。

#### ○ 代償植生

代償植生としては、モチツツジーアカマツ群集や、アベマキーコナラ群集が広く分布する。モチツツジーアカマツ群集は、低地の乾性立地に成立する常緑針葉樹二次林であり、アカマツが優占し、低木層にモチツツジが出現する。この群集は市内で最も広く分布しており、北部に生育状況のよい群落が広がるが、南部はマツ枯れの被害が深刻である。アベマキーコナラ群集は、内陸部の乾燥立地に成立する落葉広葉樹林であり、土壤条件が比較的良好な地点ではアベマキが優占し、尾根近くや急な斜面ではコナラが優占する。市内の他の群集と比較すると、カキノキ、アズキナシ、アオハダ、ヤマツツ

ジ、クリ等が高い頻度で出現することで区別される。この他、アカメガシワーカラスザンショウ群落、クズ群落、シイ・カシ二次林などが分布する。

## ○ その他

植林地として、スギーヒノキ群落が山裾や谷沿い、集落周辺などに成立しているが大規模なものは見当たらない。

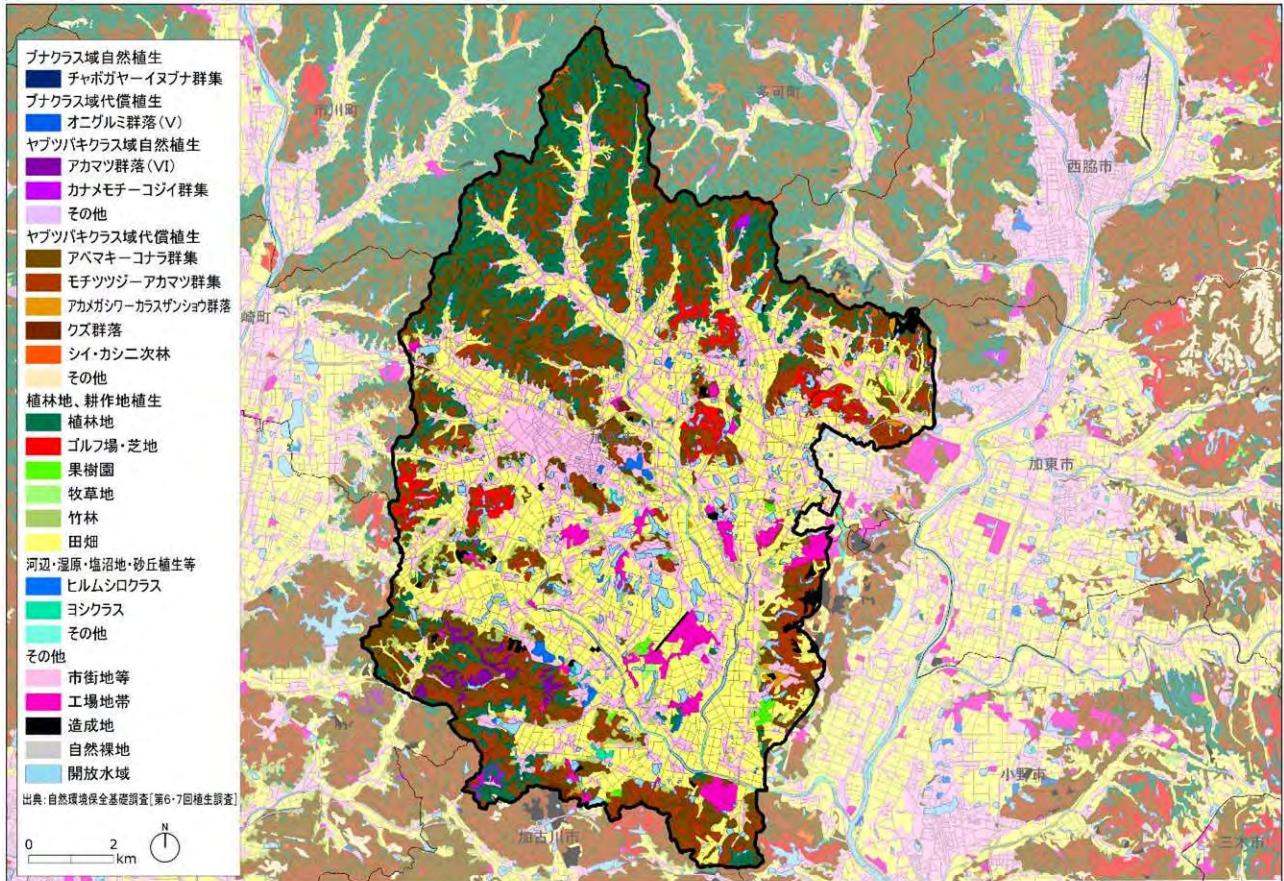


図 2-20 植生区分

## ② 重要な生態系（図 2-21 参照）

加西市の貴重植物群落として、まとまった面積の自然林がのこる「普光寺のコジイーカナメモチ群集」や、貴重な動植物の生息生育環境となっている「長倉池の湿地植物群落」等の 12 カ所が挙げられている。

兵庫県はため池が全国で最も多い県で、兵庫県農政環境部農林水産局農地整備課調べによると、平成 29 年（2017）4 月 1 日現在、農業用ため池数は 37,696 カ所を数える。加西市にも 908 カ所の農業用ため池があり、池の維持管理にさまざまな努力がなされてきた。ため池は、多くの動植物の生息・生育環境となってきたが、近年、埋立てや改修工事、水質汚濁が各地で進み、ため池が消失したり、環境の悪化が進んだ結果、ため池に生息していた昆虫や植物の多くが消滅の危機に瀕している。しかし、市内のため池の各所には、他の市域では消滅した水草や湿地の植物が残っていることが確認され、環境省や兵庫県などが絶滅危惧植物としている種が、水草に限っても 26 種確認されている。湿地の植物でも、サギソウ、トキソウ、イシモチソウをはじめ多数の絶滅危惧種が見られる。例えば、ミズトラノオは、他の地域で



サギソウ

は見ることが少なくなった植物であるが、加西市には全国有数の規模の群落が残る。このように、加西市のため池群や湿地の生物の多様性が高く評価され、「東播磨北部地域の農業用水系」並びに「あびき湿原」は、「生物多様性の観点から重要度の高い湿地（日本の重要湿地 500）」（環境省）に選定されている。

市内に生息する水生動物の多くが、ため池や湿原と関わりを持って生活している。ため池で繁殖するカエルの代表は、ウシガエルとモリアオガエルであり、ウシガエルは市中央部に広がる多くの池で、モリアオガエルは、中国自動車道より北側の多くの谷で、卵塊を見ることができる。また市内にはさまざまな様相のため池があり、それに応じて数多くの種類のトンボが生息する。例えば、チョウトンボ、ギンヤンマ、イトトンボの仲間、絶滅危惧種のベッコウトンボやナニワトンボ等の他、他の地域では消えてしまったコバンムシ等、貴重な昆虫が多数残されている。しかし、こうしたため池の貴重な動植物相は、移入種により存続の危機にある。1950 年以前に移入されたタイワンドジョウ、ウシガエル、アメリカカザリガニ等は、在来種に壊滅的な影響は与えなかったが、1980 年頃から密放流されたブラックバスやブルーギルが増加すると、それまで普通にみられたメダカ、カワバタモロコが徐々に姿を消している。

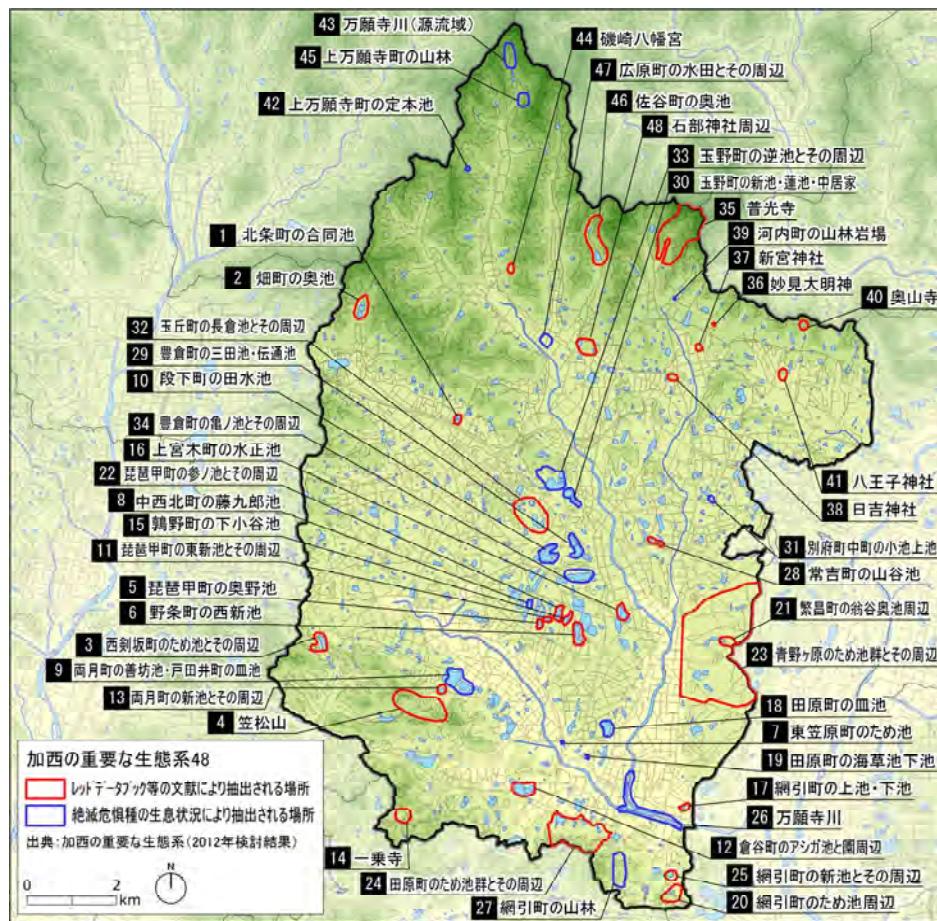


図 2-21 加西の重要な生態系



ミズトラノオ



モリアオガエル



カワバタモロコ



あびき湿原  
(20 網引町のため池周辺)



普光寺の  
カナメモチーコジイ群集  
(35 普光寺)

### (3) 歴史・文化環境

#### ア 地域の歴史

##### ① 先史（旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代）

###### ○ 旧石器時代

旧石器時代は、石器でつくった槍などの狩猟具を用いて動物を捕獲する狩猟活動が中心であり、人々は一つの場所に定住せず、動物の群れを追って広範囲を移動したと考えられている。加西市域では、当時の状況を復元できる明確な遺跡は見られないが、逆池遺跡（玉野町）や善坊池遺跡（両月町）、東長本遺跡（北条町古坂）などの9つの遺跡において、後の時代の堆積物に含まれる形で、旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器、石刃状の縦長剥片などが出土しており、旧石器時代には、既に加西の地で狩猟活動が営まれていたことがうかがえる。その中には、瀬戸内海沿岸部で優勢なサヌカイト製の石器も見られ、広範囲の移動や交易があったと考えられている。



ナイフ形石器  
(東長本遺跡出土)

###### ○ 縄文時代

日本列島で土器が出現してから、本格的な水稻耕作が開始されるまでの時代が縄文時代と呼ばれ、人々は竪穴住居に暮らし、土器を用いながら狩猟採集の生活を送っていたとされる。本市には26カ所の縄文時代の遺跡が確認されている。一万数千年間に及ぶ縄文時代は、土器形式によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分されて、文化の変遷が捉えられている。

山枝遺跡（山枝町）や新池野散布地（繁昌町）は、草創期を中心に流行した有茎尖頭器が、また、南上山遺跡（中野町）では早期前半の石鏃に類似したトロトロ石器<sup>(1)</sup>と呼ばれる石器がみつかっている。前期から中期では、堀山遺跡（網引町）や岡田遺跡（西谷町・谷町）などがある。堀山遺跡では、多数の礫の下から中期前葉の土器と石器が出土した土坑が検出され、墓の可能性が高いと考えられている。また、岡田遺跡では、他地域からもたらされたと考えられる工芸的に美しい装身具（玦状耳飾り）をはじめ、膨大な量の石器が出土し、石器製作のムラとして注目されている。後期では、有馬遺跡（和泉町・山田町）、石堂遺跡（北条町東高室）、野間遺跡（中富町）など、晩期では長磯遺跡（殿原町・中富町）などがある。



玦状耳飾り  
(岡田遺跡出土)

###### ○ 弥生時代

弥生時代前期には播磨地域における水田稲作が始まる。本市には43カ所の弥生時代の集落遺跡が確認されている。万願寺川左岸の低地に立地する野間遺跡（中富町）や長磯遺跡（殿原町・中富町）では前期の土器が出土し、本市の弥生文化の始点とも言える。弥生時代中期以降には万願寺川や普光寺川、下里川などの河川沿いを中心に、竪穴住居跡や土壙墓、石器や弥生土器などの数多くの遺構・遺物が検出された長塚遺跡（上宮木町・豊倉町）や柿ノ木遺跡（玉野町）、森ノ下遺跡（都染町）、村前遺跡（西上野町）などの集落遺跡がみられ、低地に集落が展開していく様子がうかがえる。また、それらの遺跡から出土する弥生土器の装飾やさまざまな道具類からは、丹波・丹後地域や播磨沿岸部、四国東部などの地域との交流をうかがい知ることができる。



竪穴住居跡群（長塚遺跡）

(1) 表面が磨かれたような光沢を帯び、固いものが溶けて軟らかくなったように見えるため、「トロトロ石器」と呼ばれている。用途は不明であるが、祭祀に使われたと考えられている。

弥生時代の水田稻作の発展は、社会構造の変化をもたらし、終末期になると、ムラの長の地位を得た人物の墓が、ムラから独立した丘の上に築かれるようになる。古墳の原型となる墳丘墓であり、本市では、周遍寺山遺跡（網引町）に3基の四隅突出墓が確認されている。

## ○ 古墳時代

本市では、古墳時代前期の古墳や集落遺跡は少ないが、中期初頭の4世紀末頃に築かれた全長109mの前方後円墳である玉丘古墳（玉丘町）の成立を一つの画期として、古墳や集落遺跡が数多く残る。この玉丘古墳には、全国でも数例しかない装飾が施された長持形石棺の一部が残ることから、特別な人物の墓であると考えられ、『播磨国風土記』（奈良時代初期編さん）では意奚（仁賢天皇）・袁奚（顯宗天皇）の二皇子との婚姻にまつわる伝承が遺る根日女の墓として記述されている。玉丘古墳の周辺には、笠塚古墳（北条町古坂）、マンジュウ古墳（北条町古坂）、クワンス塚古墳（玉丘町）などの中期古墳が築かれている。かめやま 龜山古墳（笠倉町）は、武具類や農工具類を納めた副葬品箱がほぼ完全な形で残る点でも貴重な古墳であり、地域の首長の墓とも考えられている。



玉丘古墳群

古墳時代後期は、横穴式石室をもつ古墳が築かれた時期であり、市内でも数多くの後期古墳が見られる。中でも剣坂古墳（東剣坂町）や剣坂熊野神社古墳（同）など、古いものは西南部に偏って所在している。また、鴨谷大塚古墳（鴨谷町）や堂山古墳（窪田町）は播磨全体の中でも十指に入る大規模な横穴式石室をもつため、次の時代に賀茂郡<sup>(2)</sup>の有力豪族となった氏族の墓とも考えられている。また、皇塚古墳（上野町）は、規模は大きくないものの、在田地区を一望できる丘陵頂上に位置し、この地域一帯の首長クラスの人物の墓と考えられている。さらに、タンダ山2号墳（吸谷町・市町村）からは、鉄鉗や鑿などの鉄製鍛冶具が出土しており、この時期の本市域の金属器製作を考え上で、欠くことのできない古墳である。そして、古墳時代の終末期になると、大規模な古墳の築造が控えられ、切石による精美な横穴式石室をもつ古墳が築かれるようになる。本市の終末期古墳には、石櫃戸古墳（西横田町）、後藤山古墳（倉谷町）などがある。



石櫃戸古墳の横穴式石室

これらの古墳の石棺の石材には、市域から産する高室石や長石が重用され、長持形石棺や家形石棺が多く制作された。高室石や長石は、海上交通で広い供給先を確保した高砂市の竜山石とは異なって、播磨内陸部に供給先が限られており、当時の石棺流通の様子を物語る。

また、遺跡の立地は、当時の人々の土地の使い方や自然観などを現在に伝える。市域には古墳時代から古代の集落遺跡が57カ所確認されているが、弥生時代の集落遺跡を含めて、これらの多くは重なって位置していることから、繰り返し同じ場所に集落が営まれてきたことが分かる。人々は暮らしに適した地を選択し、現在の農村景観の基礎をつくり出すとともに、そこから程近い山や丘、台地やその裾に数多くの古墳を築いてきた。また、そのような山や丘、台地の裾には、燃料の調達のしやすさ等を背景に、5世紀末頃の馬谷下池散布地（別府町）、6世紀前葉～中葉の口クロ谷窯跡群（田谷町）、6世紀末～7世紀初頭頃の野田窯跡群（野上町）といった須恵器の窯跡も立地している。また、『播磨国風土記』には、地域のランドマークとなる山や丘が数多く挙げられ、それにまつわる伝承が掲載さ

(2) 『播磨国風土記』の記載に関連する場合のみ「賀毛」を用い、その他は「賀茂」とする。

れているように、先史～古代の人々にとって、山や丘は特別な意味をもっていた。このことは、糠塚山周辺への後期古墳の集中や亀山山頂への古墳の築造など、古墳の立地からもうかがえる。そして、このような山や丘を聖地とする考えが受け継がれ、古代以降、靈場が拓かれ、寺院が建立されるなど、山や丘は信仰の場・対象となっていました。

## ② 古代（飛鳥時代・奈良時代・平安時代）

### ○ 国家の形成と播磨

大和と吉備の間にあって瀬戸内海に接する播磨は、王権の形成過程で大きな役割を果たしてきた地域の一つであり、本市が位置する賀茂の地域も、造船用の材木の供給地として、それらの王権と深い関係をもってきた。当時は各地に大きな力をもつ豪族が存在し、播磨にも、意奚（仁賢天皇）・袁奚（顯宗天皇）の伝承を生み出すような豪族が存在していた。そして、5世紀後半になり、大和への権力の集中が進められる中で、地方の豪族は中央政権との血縁関係を結んでさらに力を強めていった。

律令体制の整備が進められ、「大宝律令」の施行により、国・郡・里の地方行政組織が整えられると、本市を含む加古川中流域は賀茂郡に編成された。賀茂郡は、十二里で構成され、約1万人強の人口規模であったと推定される。

### ○ 古墳から寺院へ

6世紀中頃、わが国に仏教が伝わり、6世紀末に本格的に導入される。その際、播磨国に住んでいた高句麗出身の惠便<sup>えべん</sup>が活躍したとされ、播磨国では早い段階から仏教が身近にあった可能性がある。7世紀末の白鳳期に作られ、日本最古の石仏の一つとされる古法華石仏<sup>ふるぼっけ</sup>（石造浮彫如来及両脇侍像）は、賀茂郡域における先進的で集団的な仏教文化の受容を象徴している。また、仏教が広まるなかで、地域の有力者の権威の象徴も古墳から寺院へと移行し、7世紀から8世紀にかけて、全国各地で古代寺院の造立が進む。賀茂郡には、7世紀後半から8世紀半ばまでに、殿原廃寺<sup>とのはら</sup>（殿原町）、繁昌廃寺<sup>はんじょう</sup>（繁昌町）、吸谷廃寺<sup>すいだに</sup>（吸谷町）など、同郡域の小野市・加東市を含めると8カ寺が建立され、古代寺院が高密度に分布していることは、当地域の仏教受容の基盤や中央政権との関係の強さ、畿内に近い重要性などを物語っているとも考えられる。この他、奈良時代には野条廃寺<sup>のうじょう</sup>（野条町）と古法華山寺（西長町）が創建されているが、後者は山林修行の道場のごく早い例としても注目される。さらに、天平6年（734）には、賀茂郡の既多寺<sup>きただいら</sup>（所在地は不明であるが、殿原廃寺が1つの候補）で『大智度論』が書写されている。全100巻におよぶこの経典は、「知識<sup>ちしき</sup>（信仰と同じくする集団）」として8世紀の播磨の地方豪族の氏姓が数多く記されている貴重な資料である。



図2-22 播磨国的位置



古法華石仏



古代寺院跡から出土した軒瓦  
(左：吸谷廃寺、中：繁昌廃寺、右：殿原廃寺)

## ○ 古代の人々の暮らし

古代の集落は、6世紀から続くものに加え、7世紀初め頃から開発が進む中で新たに形成されたものが多くあり、8世紀にその数は40カ所を超えてピークを迎える。特に万願寺川流域に密に分布しているが、吸谷廃寺の近くの富田地区や殿原廃寺周辺の在田地区にも古代の集落があり、市域全体に人々の暮らしが展開していたことがわかる。また、朝垣遺跡（上野町）や岡田遺跡（西谷町）、三子遺跡（都染町）などからは製塩土器も出土しており、塩の流通が播磨内陸部に及んでいる状況がうかがえる。さらに酒見寺付近と考えられる酒見郷の地名は、朝鮮半島から渡ってきた醸造に関わる集団の居住も想起される。

7世紀後半には人々の住居も、竪穴住居から掘立柱建物への移行が進んでいたとみられる。また、8世紀の集落遺跡からは、土器に文字を書いた墨書き土器が出土しており、この頃には文字が村落にまで普及していたことがわかる。これらの変化は都でも同時期にみられ、中央からあまり遅れることなく、文化が波及している様子がみてとれる。

このような中で編さんされた『播磨国風土記』は、現存する5つの風土記の1つである。地名起源などのさまざまな地域独自の伝承が記され、その中には農作業を行う神が登場し、農具に関する語が数多く含まれるなど、豊作を祈り、感謝する人々の自然に対する信仰を読み取ることができる。また、古来、多くの人や物が行き交う播磨には、朝鮮半島からの渡来人も居住したことや、芸能民が都に上り、宮廷の儀礼の場に奉仕していたことなども知ることができる。

## ○ 中世社会への足音

10世紀頃になって律令制が崩壊する中で、受領と呼ばれる国司が直接的に地域社会を把握するようになる。播磨の場合、早くに天台別院が設けられたという9世紀以来の素地に加え、天台浄土仏教の隆盛という中央の状況がそのまま持ち込まれている。また、「播磨六力寺（國衙六力寺）」と呼ばれる天台宗寺院が、受領支配に大きな役割をはたした。このことは、『峯相記』で、書写山圓教寺（姫路市）、増位山隨願寺（姫路市）、法華山一乗寺（加西市坂本町）、八徳山八葉寺（姫路市）、妙徳山神積寺（福崎町）、蓬萊山普光寺（加西市河内町）の六力寺を紹介した後、「已上六力寺は公家・武家の御願所にて、國衙の最勝王經講讚・仁王会等を勤修す」と記されており、本来は国分寺で修されるべき法会が、国分寺の衰退後には六力寺に継承されたことからも分かる。また、同書には、長寛2年（1164）に酒見社（現住吉神社と酒見寺（北条町北条））で六力寺衆徒による大般若經誦誦と論議からなる酒見講が創始されたことも記されている。



法華山一乗寺

## ③ 中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）

### ○ 動乱と変革の時代

11世紀末から12世紀の院政期、院の権力に従い仕えることで、その力を蓄えていったのが平家（平清盛につながる伊勢平氏の一党）である。播磨国は、平家が拠点とした摂津国福原を支える後背地として重要な位置を与えられた。そして、平家とのつながりをもちつつ、国衙と特別の関係を有する「播磨六力寺」が大きな力を保持した。しかし、源平の争乱を経て平家が滅びると、平家の重要基盤の一つであった播磨国、そして本市域も大きな変動を被ることになる。公家政権と武家政権の対立や武家同士の対立など、動乱と変革が続く中世において



住吉神社（旧酒見社）

て、播磨国は都に近く、都に通ずる要衝であったが故に、中央の政争の渦に巻き込まれる。

鎌倉時代になると、源頼朝の命を受けて、梶原景時かじわらかげときが播磨の軍事・警察権を握り、在地の武士を組織化していった。しかし頼朝の死後、景時は失脚し、播磨国守護には下野國の御家人小山朝政おやまともまさが任じられた。続いて守護となつた後藤基清ごとうもとときよが承久の乱で失脚すると、同乱の恩賞として安保実員あほさねかずが守護となる。しかしこれも長くは続かず、貞応2年（1223）、再び小山氏が守護に任じられた。

源頼朝によって開かれた鎌倉幕府も源氏は三代で途絶え、北条氏の支配へと代わる。14世紀になると鎌倉幕府の力も衰え始め、地方では在地の武装集団が横行して強大化し、「悪党」と呼ばれるようになる。播磨では西播磨に拠点を置く赤松氏が徐々に勢力を拡げ、元弘3年（1333）、赤松則村あかまつのりむら（円心）は、後醍醐天皇の倒幕の呼びかけに応じて、播磨国で挙兵する。円心は倒幕軍の一翼を担って戦功を上げ、赤松の名は知られるようになった。しかし、播磨国守護には新田義貞にったよしさだが就いたように、建武政権下ではめぼしい恩賞を得ることができなかつたことから、建武政権への不満を募らせていった。円心は、建武政権と対立した足利氏に味方するようになり、建武3年（1336）、九州に敗走していた足利尊氏・直義あしかがたかうじ ただよしの兄弟が勢力を回復し、湊川合戦で新田義貞・楠木正成くすのきまさしげの軍を破ると、新田氏は播磨国支配を放棄して京都に退却、赤松氏が実質的な播磨国守護となる。なお、この時、九州から陸路を進んだ直義の軍勢の一部（大将駿河守今川頼定）は、周遍寺（網引町）に陣を張っている。足利尊氏による室町幕府の成立と安定に貢献した赤松氏は、播磨を支配下に置く播磨国守護として、加西でも赤松一族やその家臣に領地や城を与えて、支配を広げていく。そして、赤松氏は、幕府の重鎮としての地位を築き、最盛期を迎えていく。



周遍寺

強大な力を持つようになった赤松氏は、嘉吉元年（1441）、折り合いが悪かった六代將軍足利義教を殺害するも、すぐに幕府方の討伐軍の細川持常・山名持豊（宗全）らに追討される（嘉吉の乱）。これにより、赤松氏はその地位を失い、播磨は山名氏の手に落ちる。その後、応仁の乱を経て山名氏の力が弱まると、赤松氏は再び播磨の領国支配を回復する。しかし、かつての勢いはすでに無く、一門や家臣をまとめる力を持つことができなかつた。求心力を失つた赤松氏に従うものは少なく、播磨各地で赤松旧家臣や地主層から成長した地侍が台頭していく。加西でも在田氏・別府氏などが、祭礼や信仰を通じ地元民との紐帯を強めながら、基盤を強化していった。そして、これらの地域勢力が、西からの尼子氏と続く毛利氏、東からの織田信長の命を受けた羽柴秀吉という戦国時代の東西からの圧力に対応していく。

## ○ 顕密仏教と地域社会

動乱と変革の不安定な時代の中で、人々は心の平穏を信仰に求め、仏教が大きく浸透・展開していく。古代以来、大きな力をもつた「播磨六力寺」の一乗寺と普光寺、そして酒見寺は、寺領を広げるなど、その力を保持し続け、加西では、中世を通じて天台宗が優位を占めた。そして、法道仙人が最初に開基した寺院として、一乗寺が核となり、中世山岳寺院と「山岳信仰（修驗道）」が持つネットワークが密接に結びつき、「法道仙人伝説」という英雄像を前面に押し出すことによって、人々の心に浸透・拡大していった。このことは、東播磨から丹波にかけての山岳地帯を中心に、法道仙人の開基と伝える寺院が数多く分布していることからもうかがうことができる。また、現在に残る経塚や西国三十三カ所巡礼の札所なども、この時期、顕密仏教（天台宗・真言宗）が一般民衆と関わりながら根付いていった様子を物語る。酒見寺（酒見社）では、「播磨六力寺」の各天台寺院から学僧が集まり「酒見講」が開催され、公開形式で行われる仏典の「論議」や「大般若經」の転読に多数の庶民が参集し

た。「酒見講」は一面で学僧を育成する働きをなし、多面で庶民層を含めた幅広い階層の人々を教化し救済する役割も果たした。

また、東光寺の鬼会で知られる鬼追いの行事は、県下では、摂津から播磨、特に播磨地域に密に分布している。市域では、現在は東光寺でしか行われていないが、かつては一乗寺、普光寺、奥山寺、曼荼羅寺（廃寺、畠町）でも行われていたと考えられている。鬼追いは、もともとは12世紀初めに京都の天台系寺院の修正会の結願日の行事として登場し、鎌倉時代末期には京都から姿を消す一方で、主として地方の顕密系寺院の修正会の行事の中に残ってきた。播磨では鎌倉時代後期から鬼追いが行われていたと考えられており、東光寺では、室町時代末期には田遊びとともに、鬼会が既に行われていたことが古文書に記されている。



東光寺の田遊び

一方、古代から現代に至るまで多くの優れた石造物が遺されている加西では、中世には板碑や古墳の石棺材を利用した石棺仏や石棺板碑がつくられ、有力農民を中心とした庶民層の信仰や生活の様子の一端を伝える。鎌倉期の板碑は、往時の政治背景のもとに、関東地方、とりわけ武藏国で特徴的にみられる形式をとどめており、承久の乱後や元寇時の西遷御家人とのつながりがみられる。また、板碑の種子や石仏の像容には、阿弥陀独尊や三尊が多く、極楽浄土への往生を説く浄土教の阿弥陀念佛の信仰が広く浸透していたことがうかがえる。この背景には、法華経を根本聖典とする天台宗系の思想のもとに、加西の多くの天台寺院で「常行三昧の阿弥陀念佛行法」（山の念佛）が行われてきたことが大きく影響したとされる。なお、この「山の念佛」は、酒見寺の「引声会」として、その伝統を現在に伝える。また、念佛衆や結衆により建立された板碑や石塔は、天台浄土教の教義に基づき建立されたものであり、天台僧の介在が見えてくる。こうした天台僧の直接的な民衆との関わりは、教化だけでなく、勧進行為の一つであったと考えられている。



石棺仏（石棺蓋石）

## ○ 念佛信仰と惣荘（郷）のつながり

念佛信仰は地域の人々の共同の営みとして行われ、互いの現生の安穏や来世での極楽往生を願うものであった。こうした信仰を通じて、莊園や郷といった中世初期以来の地域的枠組みの中に、地縁的なつながりが強められ、近世・近代へと続く新たな自治的共同体としての村が成立していったと考えられる。そして、そのつながりの核となったのが、村の鎮守に対する信仰であった。市内の多くの町で「オトウ行事」（1年間の神社の宮守役を務める当人の新旧交代の儀式）が伝わり、河内町の「鎌倉禱」は、鎮守の祭祀組織である宮座の中世の姿をとどめるとされる。また、中世末の混乱期には、武士勢力に対応するため、莊や郷など、村を超えた地縁集団（惣荘・惣郷）を生み出す。日吉神社（池上町）の秋大祭の「七社立会神事」（現在は六社立会）は、中世の惣荘（郷）の結合のありようを今に伝える行事とされている。



日吉神社の秋大祭

## ④ 近世（安土桃山時代・江戸時代）

### ○ 織豊政権期の加西郡

播磨東八郡を領した三木城（三木市）主の別所長治は、羽柴秀吉の播磨侵攻に抵抗し、天正6年（1578）3月に三木合戦が始まった。別所氏は三木城と属城のネットワークで兵糧を確保し、長期に

わたる籠城で対抗した。三木城には周辺の地侍たちが多数籠城し、加西からも、山下村の浦上久松をはじめ、多くの地侍が三木城に籠城した。しかし、秀吉による「三木の干殺し」と呼ばれる徹底した兵糧攻めにより、天正8年（1580）正月、別所氏は滅ぼされ、播磨平定がなされる。

その後、播磨国は秀吉の直轄領となり、本市域にも秀吉一族の領地などが配置されて、天下統一や朝鮮出兵などを支えた。そして、天正・文禄期の検地を通して兵農分離が進む中で、別所氏に従った地侍は刀を捨てて帰農し、庄屋など、村の有力者として近世社会を支えていく。

### ○ 加西の非領国型支配

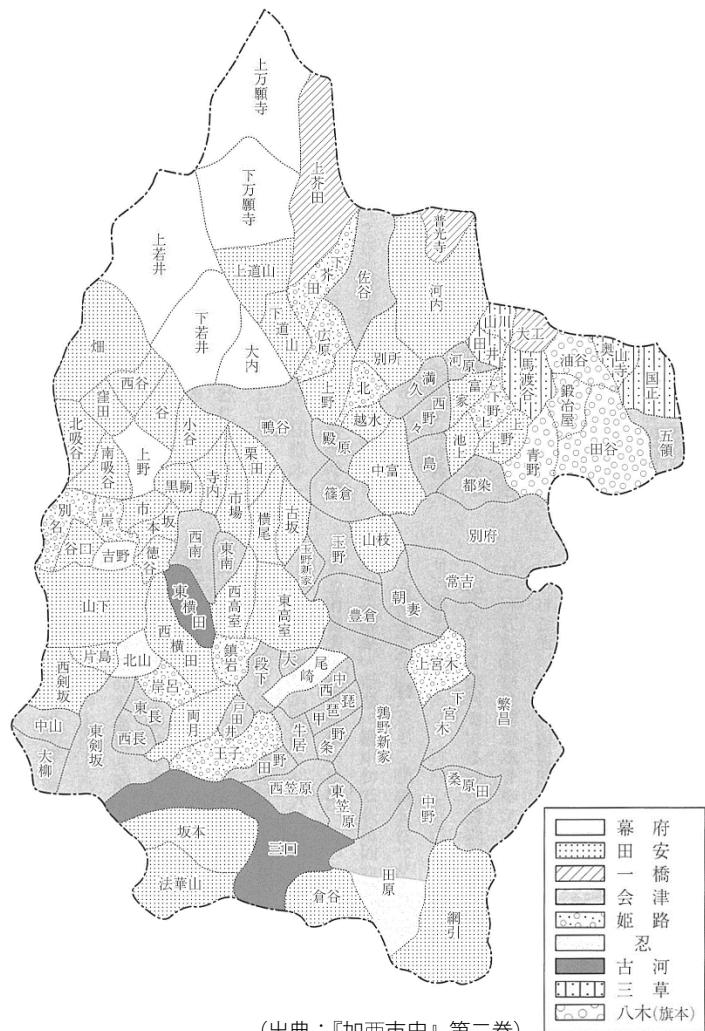
慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いにより西軍が敗北すると、池田輝政が姫路城に入り、播磨国52万石を支配した。しかし、慶長18年（1613）、池田輝政が死去すると、播磨国は分割され、やがて外様大名領のほか譜代大名領・幕領が生まれ、大名の飛び地等も設定されるなど、多様な領主が所領を持つ非領国型の支配体制となつていった。（図2-23参照）

その中の一つに、後に「忠臣蔵」で知られる赤穂事件を起こした浅野赤穂藩がある。本市には浅野家支配当時の農政文書が散見され、その中には四十七士の一人で加西・加東の郡代を務めた吉田忠左衛門の名が見えるものもある。また、歴代浅野家当主から帰依を受けて祈願所となつた久学寺（上芥田町）や、小野寺十内親子の菩提寺である多聞寺（尾崎町）、奥野将監が隠棲した跡と伝える場所（下道山町）など、浅野赤穂藩とのつながりを偲ばせる歴史文化遺産が数多く残っている。

非領国型の支配が続く中で、領主が異なる場合の訴訟などの広域的な支配は坂本町奉行が担当しており、地域の人々の共通の課題を解決することは容易ではなかった。そこで、播磨国の人々は、文政10年（1827）に一国単位で集会（播磨国集会）を開き、村落間の訴訟を惣代庄屋らによって解決していくことや、徘徊する宗教者・浪人を取り締まることを約束した。これを契機に、さらに具体的な問題を取り上げるために、東播五郡（多可・加東・加西・美嚢・印南）集会、そして、加西一郡集会が開催され、地域を絞り込みながら、課題の解決を目指して自主的な取締り体制が形成されていった。

### ○ 近世の村落社会

古くから酒見社（住吉神社・酒見寺）の門前町が形成され、戦国時代に小谷城主赤松氏によって古市場が開かれて市場町として賑わってきたといわれている北条も、羽柴秀吉による天正の兵乱により大きな被害を受けたと考えられている。しかし、町場として急速に回復し、江戸時代には、京都と出雲を結ぶ東西の街道（旧丹波街道・旧但馬街道）、南北の街道（旧姫路街道・旧加古川高砂街道）が集



（出典：『加西市史』第二巻）  
図2-23 幕末期の加西市域の所領配置

まる宿場町として栄え（図 2-24 参照）、17世紀末頃には現在の観光スポットとなるような整った町並みの基礎が形成されたと考えられる。

一方、本市域の近世農村の実態は、慶長 6・7 年（1601・1602）の検地帳からも読み取れる。集められた年貢米は、舟運業者（藏元）が高瀬舟に積み込み、加古川・市川の河岸から高砂・飾万津へ送り、大坂・江戸などに廻送された。

徳川吉宗による享保改革では、年貢増徴のために新田開発が奨励された。

加西市域では、鶴野新家、五領新田、玉野新家、青野原新田、九兵衛新田、又藏新田などの新田開発が進められた。中でも青野原新田の開発は、台地上への用水の確保の問題などから失敗を繰り返した後、幕府の援助によって実現した大事業であった。同新田の開発では、新条池（和泉町）や了徳寺池（鍛治屋町）とそれらを結ぶ用水路「任せ溝」、また普光寺川の野上井堰（野上町）とそこから青野原への用水路「天下溝」などが築造された。これらのため池や用水路の一部は現在も残り、当時の様子をうかがい知ることができる。

## ○ 産業経済の展開

加古川・市川の河川舟運、京都・山陰への陸上交通などを背景に諸産業も展開した。

酒造業は、総じて小規模ではあったが、現在も江戸時代後期に創業した2つの造り酒屋（三宅酒造、富久錦）が伝統を受け継いでいる。また、多くの村で綿花が栽培され、自家用として綿織物がつくられてきたが、18世紀には商業的な綿織物業も展開したとみられる。さらに、中世以来、播磨国の特産物として著名な杉原紙は、近世になると加西郡内の三原谷（現多可町八千代区）で生産が盛んになり、三草藩が専売制を敷いた。この三草藩の専売品の取り扱いを担ったのが北条の商人であった。小藩である三草藩は、中央市場とのパイプや資金力を持ち、流通ルートに対応できる北条の商人に頼らざるを得なかったためである。

また、近世の加西では、町村札や寺社札、私人札などの紙幣が数多く出され通用していた。これは、藩による強制が弱く、加古川筋を中心に多くの豪農商が存在していたためであり、姫路藩札の通用が強制された姫路藩領とは対照的である。加西の商人は、京・大坂でも展開する近隣豪商の取引網に依拠して資金を調達していく。このように、権力から保護を受けたり依存したりできない加西の人々は、そのデメリットを逆手にとって、経済活動を展開していく。

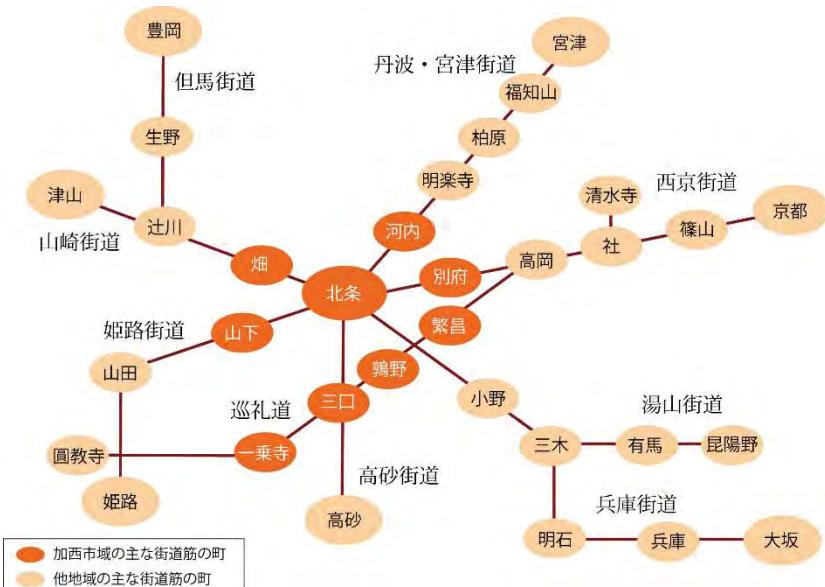


図 2-24 近世の街道筋による他地域とのつながり（模式図）



北条の町並み



天下溝



富久錦

## ○ 知識人の活動と文学

加西には、姫路藩や小野藩のような藩校・藩学がなかったが、政治的・経済的に大坂と直接結びついていたこともあって、両藩および三草藩との関係を深めつつ、自由に京・大坂の文人と交流した。

加西の文化人の活動は、18世紀後半から19世紀初頭にかけてひとつのピークを迎えた。その中心は医者の児島尚善こじま しょうぜん（1744～1815）であった。尚善を中心とした文化人の輪は、京・大坂との恒常的なつながりの中で、医学や漢学、和歌、俳句、絵画、茶道などと幅広く展開した。そして、その中から尾芝静所おしば せいしょや伊藤君嶺いとう くんれいといった藩儒も誕生するとともに、在村文化を開花させた。

19世紀中頃から幕末にかけては、それまでの関係がさらに深まり、血縁関係も生まれて、大坂の文人墨客が北条を訪れるようになり文化が伝播された。このほか蘭方医の長田元意や徳岡左門、歌人の青山雄子、俳人の高瀬帰厚などが活躍している。

## ⑤ 近代（明治時代・大正時代・昭和前期（戦前～戦時））

### ○ 近代の地方行政

廃藩置県によって旧来の封建制度は解体され、中央集権化が進められた。明治4年（1871）の廃藩置県から明治11年（1878）まで、地方には大区小区制が敷かれ、加西市域は飾磨県第5大区となり、7小区が設定された。その後、飾磨県が廃止されて兵庫県となり、小区は3小区に整理統合されるなどの再編が続く。明治21年（1888）に市制・町村制が施行されると、加西市域は明治初年の121の自然村が1町10力村（北条町、富田村、賀茂村、下里村、九会村、富合村、多加野村、芳田村、大和村、西在田村、在田村）の地方自治体にまとめられ、昭和30年（1955）の昭和大合併に至る。

### ○ 富国強兵から第一次世界大戦

明治政府は、文明開化や地租改正、殖産興業を通じた経済力の向上（富国）と、徵兵制度や軍制改革を通じた軍備増強を図った。加西は開港場の神戸からもほど近く、政治外交上、行政上、社会上、文化上の影響は村や町の津々浦々にまで及び、徵兵制度や地租改正、近代教育の導入等が進められた。

軍備増強が図られる中で加西近郊では相次いで軍事演習が行われた。そして、特に本市域が軍事とのかかわりを深めたのが、明治21年（1888）の加西・加東両郡にまたがる青野原軍馬育成所の設置であった。その後、明治27年（1894）に日清戦争、明治37年（1904）に日露戦争が起こると、加西から多くの兵士が戦地に赴いた。

一方で、米作りが主な産業であった加西では、九会・富合・下里の三力村にまたがる平坦かつ肥沃な飯盛野の効果的な利用策を講じることが、勧業面で重要な課題であった。水利に乏しく、開墾の成果が出ない日々が続いていたが、明治30年（1897）に私立加西郡勧業会ができ、万願寺川の水を引く大規模な灌漑・疎水事業が進められることとなった。万願寺川下流域の住民の反対や日露戦争により、事業は一時停滞するも、日露戦争後の明治40年（1907）3月、飯盛野疎水が完成した。この時、中国東北部の地名を冠した奉天池、旅順池も新たに築造されているように、この事業には、日露戦争の戦勝記念事業という意味も付加された。

日清・日露の2つの戦争は、明治に入って産業化がなってきた織物業（播州織）を大きく発展させた。外貨獲得のための輸出拡大が図られ、工場制生産が中心となり、明治38年（1905）には加西郡織物組合が創設された。郡内の生産は一層増加して、明治末頃には専業30工場に賃織物業者を加えると120工場に達している。一方で、大正天皇の即位大礼の奉祝に沸いた大正4年（1915）には、播州鉄道北条支線（大正12年（1923）に播丹鉄道北条線、昭和18年（1943）に国鉄北条線となり、昭和60年（1985）より北条鉄道となって現在に至る）も開通している。

大正3年（1914）から大正8年（1919）の第一次世界大戦では、日本は日英同盟に基づいて連合

国の一員として参戦した。大戦中、交戦国であったドイツとオーストリア＝ハンガリーの兵士を収容する施設が各地に置かれるが、青野原俘虜収容所（青野原町）もその一つである。

第一次世界大戦時、播州織を含む織物業界全体は、東南アジアへの輸出に沸き、綿糸・綿布相場は急騰して、戦争が終わる大正8年（1919）には最高値に達した。しかし、戦争終結とともに不況に入り、織維業界も苦境に陥っていく。



捕虜が描いた青野原収容所  
(W.Tegge 作)

### ○ 第二次世界大戦と姫路海軍航空隊基地

大正デモクラシー後、昭和恐慌、満州事変後の戦争の影響を受けて軍国主義化が進んで社会状況は反転した戦時動員体制に地域社会が組み込まれていった激動の時代であった。

昭和12年（1937）に始まる日中戦争が泥沼化するなか、日本は国民精神総動員運動、国家総動員法に次いで、大政翼賛会が結成され、戦時体制の構築が進んでいき、加西の人々もこの総動員体制に組み込まれていった。生活物資の欠乏、統制の強化は次第に産業や日常生活を窮屈にしていき、加西を中心とした織維産業はもちろん、商業も衰退していった。そして、昭和16年（1941）に始まる日米戦争は、こうした窮状をさらに深めた。戦局が悪化の一途をたどるなか、人々の暮らしは、食糧増産に駆り出される女性や子どもの姿、主要物資の配給状況、文化団体も報国一色に染まるなど教育・文化の面でも戦時色が強まってくる。



姫路海軍航空隊基地庁舎  
(写真提供：上谷昭夫)

昭和17年（1942）6月のミッドウェー作戦の失敗により、日本海軍は戦場での制空権の重要性を認識し、同年秋にパイロットを養成するため、航空兵力の増隊を決定した。昭和18年（1943）3月、姫路海軍航空隊基地（鶴野飛行場）の建設工事が始まり、地元住民や朝鮮人労働者、加西郡・加東郡などから勤労奉仕団が従事し、同年10月に姫路海軍航空隊（以下、姫空という）が鶴野に開隊する。姫空は、実用訓練を行う練習部隊であり、実習教程を終えた隊員が全国の航空隊に赴任していった。昭和19年（1944）12月には、川西航空機姫路製作所鶴野工場が開設し、姫路で作られた機体を運び込み、鶴野飛行場で試験飛行を行って完成した機体が海軍に引き渡されていった。このなかで、昭和20年（1945）3月には、最終検査中の紫電改のエンジンが急停止して不時着しようとした際に、国鉄北条線の線路を引っかけたことにより、列車転覆事故を引き起こし、多数の死者・負傷者を出すという事故も発生した。



北条鉄道網引駅前の  
列車転覆事故解説看板

昭和20年（1945）2月、戦局の悪化に伴い、川西航空機姫路製作所等の工場疎開が計画され、北条（高室）の特殊地下壕などがつくられたが、操業には至らなかったという。また、実用教程練習航空隊から特別攻撃隊が編成されることになり、姫空からも志願者が募られた。同年3月には、白鷺隊と名付けられた特攻隊が結成され、多くの隊員が戦地へと派遣され、帰らぬ人となった。軍事基地が置かれた鶴野は空爆の対象となり、昭和20年（1945）3月と7月に本格的な空襲を受けた。そして、同年8月15日、ポツダム宣言を受諾して終戦を迎えることになった。

### ⑥ 現代（昭和中～後期（戦後）・平成）

#### ○ 戦後の非軍事化と基地跡地の利活用

終戦後、飛行場や軍需工場が置かれた関係から、加西には早くから占領軍が姿を見せ、兵器や弾薬

が処理され、非軍事化が進められた。終戦直後の昭和 20 年（1945）8 月、政府が食糧難緩和のための緊急開拓事業実施の政令を出すと、県は青野原旧陸軍演習場と鶴野飛行場の開拓を決定し、離職する工員や復員軍人、戦災者、引揚者の帰農促進を図って入植者を募集した。青野原では 200 人、鶴野飛行場では 100 人が入植して開墾作業が進められたが、インフレや物価高騰、食糧不足が深刻な中での重労働であり、また、酸性の強い赤土の開墾でもあったため相当な苦労を伴ったという。一方で、占領軍の指揮下で政府により進められた農地改革は加西にもっとも大きな影響を及ぼし、自作農地の比率を飛躍的に増大させていった。さらに、戦時体制から平時体制への移行は、産業の非軍事化を進め、繊維産業の復活や三洋電機の創設は、加西の復興を端的に示すものであった。

姫路海軍航空隊基地の滑走路を含む一部はアメリカ軍に接収されたり、昭和 27 年（1952）4 月には警察予備隊（自衛隊の前身）が旧航空隊兵舎に進駐したりした。昭和 32 年（1957）9 月には、接収も解除され、滑走路は大蔵省の管轄となり、昭和 37 年（1962）には、農林省・防衛庁に引き渡された。昭和 41 年（1966）には、県立兵庫農科大学の神戸大学移管に伴い、一部の土地で農場（現神戸大学食資源教育研究センター）の建設工事が着手された。当時、敷地内には建物基礎、防空壕などが散在していたが、これらの頑強なコンクリート構造物は、工事予算の都合上完全に撤去できず、一部はそのまま残っている。残りの土地についても、その利用に関してさまざまな議論が続いた。地元住民は完全なる払い下げを希望し、他方では播磨空港として活用すべきという意見も相次いだが、結局、飛行場の話は立ち消えとなった。



鶴野飛行場跡

平成 19 年（2007）には、防衛省に対して払い下げ要望をあげ、払い下げに向けた調整が進められた。そして、平成 28 年（2016）には、払い下げの手続きが完了し、市では、観光・平和学習や防災の拠点、地域住民の憩いの場としての整備を計画している。

### ○ 昭和の大合併と加西市の誕生

昭和 30 年（1955）前後に全国的に進められた昭和の大合併の中で、1 町 10 村があった加西郡においても合併がすすめられた。昭和 29 年（1954）には、芳田村が西脇市、大和村が八千代町（現多可町）に合併した後、昭和 30 年（1955）には、現在の加西市域を構成する 1 町 8 村がそれぞれ合併して、北条町、加西町、泉町の 3 町が成立した。

町村合併が進んで 3 町体制となった後も、さらに 3 町合併の機運が盛り上がり、昭和 38 年（1963）には、加西郡広域行政調査特別委員会が発足し、市名や庁舎位置などのさまざまな協議・調整を経て、昭和 42 年（1967）に現在の加西市が発足した。

### ○ 市制施行後の加西

加西市が発足した昭和 40 年代前半、日本はまさに高度経済成長の真っただ中にあり、日本中が都市化、近代化、工業化へと突き進んだ時代であった。昭和 44 年（1969）3 月の「加西市総合開発基本計画」（第 1 次）では、加西市の位置づけを「西日本経済を支える阪神工業地帯と今後飛躍的な発展を遂げるであろう播磨臨海工業地帯の後背地としての内陸工業化と、これらの発展に伴い住宅、或いは観光レクリエーション地帯としての位置と条件を具備している」と捉えて、地域の総合的な開発と産業の振興が目指された。そして、このような考え方のもとに、糞屋ダムの建設や加西ハイツの大規模開発とその中心への加西病院の建設、中国縦貫自動車道の開通といった市の基盤が形成・整備されていった。

昭和 52 年（1977）3 月に策定された「加西市総合計画」（第 2 次）では、それまでの開発が必ずし

も相互に総合的でなかったことを反省して、全市的な土地利用の秩序を形成すること、そして将来像を「緑豊かな田園文化都市」と位置づけ自立性が高く、環境の良い住み良い都市づくりを進めることを目指した。県が推進する「緑の回廊づくり」のもとに昭和 50 年（1975）には、「緑の自然歩道 加西市コース」が決定され、昭和 51 年（1976）には、「兵庫県立フラワーセンター」、「いこいの村はりま」がオープンされるなど、開発一辺倒ではない加西の個性づくりが進められた。



（出典：兵庫県立フラワーセンターホームページ）  
兵庫県立フラワーセンター

一方で、自家用車の普及やバス路線の充実等を背景に、昭和 40 年代から廃線の危機にあった国鉄北条線は、運輸省・国鉄への陳情や廃止反対運動等が展開するも、昭和 57 年度末までに廃止されることが決定した。廃止期限が迫る昭和 57 年（1982）になると、存続運動側に変化がみられ、国鉄に固執せず、柔軟かつ現実的な対処で鉄軌道を存続して市民の足を確保しようと、第三セクターの気運が高まる。そして、昭和 59 年（1984）には、県・沿線各市・民間企業等でつくる



北条鉄道

第三セクターによる新会社がレールバスを運行する形で存続することが決定、昭和 60 年（1985）3 月 31 日に国鉄北条線は最後の日を迎えると、翌 4 月 1 日から新生北条鉄道が営業を開始した。

昭和 61 年（1986）6 月に策定された「加西市総合計画」（第 3 次）では、「花と緑につつまれた人間交流都市ーかさい」を目標として、12 の重点プロジェクトを掲げた。そして、同計画に基づいて、中国道加西インターチェンジの着工や市庁舎の整備、米国プルマン市と友好都市提携協定の締結、北条町駅周辺地区の市街地再開発、新規工業団地の開発など、さらには、平成 7 年（1995）には、建設省から「歴史街道モデル」事業計画策定地区の指定を受けて、市内の歴史文化遺産を活かしたまちづくりを目指すための「街道計画整備プラン」を策定して、町並みや交通網、公園などの整備を進めてきた。平成 7 年度から平成 12 年度に玉丘史跡公園整備事業を実施して、平成 13 年（2001）に玉丘史跡公園を開園し、地域の憩いや観光・交流、学習等の拠点となっている。さらに、「加西 C I 宣言」に基づき、キャッチフレーズ「花・ゆめ・根日女」と、市のキャラクターマークを定めて、市の統一イメージを打ち出し、地元産品の売り出しや各種イベントの開催などの情報発信を積極的に行ってきた。



加西市キャラクターマーク

その後も、平成 13 年（2001）3 月策定の「加西市総合計画」（第 4 次）や、現行の平成 23 年（2011）9 月策定の「第 5 次加西市総合計画」に基づき、人や健康、産業、暮らし、環境などを視点しながら、豊かな生活環境づくりや地域の活性化、産業や観光の振興などに向けてさまざまな取り組みを展開している。特に近年では、「健幸都市加西」を目指した「加西市歩くまちづくり条例」の制定、若者の定住促進による地域活性化や人口増に向けた「加西市若者主役計画」の策定、気球の飛ぶまち加西の定着に向けた「気球の飛ぶまち加西条例」の制定などにみられるよう、個性豊かな取り組みも展開している。また、歴史文化の面では、歴史ウォークや「加西市播磨国風土記 1300 年祭」などのさまざまなイベントの継続的な開催、加西能などの新たな歴史文化の創出などの魅力づくりに取り組むと同時に、平成 29 年（2017）には、古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）が開館され、新たな歴史文化の拠点としての活用を進めている。



気球の飛ぶまち加西

## イ 加西市の歴史文化遺産

加西市の歴史文化遺産の中でも、特に学術的・芸術的な価値が高いものは、文化財保護法・条例に基づく指定や登録をして、保護してきた（以下、これらを「指定等文化財」という）。しかし、指定等文化財の他にも、加西市には、先史から現代に至る長い歴史の中で、数多くの歴史文化遺産が育まれ、受け継がれている。それらには、これまでの調査・研究で実態や存在が明らかにされている歴史文化遺産だけでなく、地域では大切にされているが、価値が広く知られていない歴史文化遺産や、未だ発見されていない歴史文化遺産なども含まれている（図2-25参照）。これらは、加西市の歴史文化のさらなる魅力の向上や、市民を主体とした地域レベルの歴史文化を活かした取り組みにあたって、欠くことのできない重要な歴史文化遺産であることから、今後も継続的に調査・研究を実施して、実態の把握や価値の評価等を進めていくことが求められる。なお、今後、調査・研究が必要となる歴史文化遺産の主要なものとして、次のような代表的な類型があげられる。

- ・茅葺民家や播州織の鋸屋根の近代纖維工場など、地域の生活・生業の歴史を伝える建築物
- ・石灯籠や玉垣、石垣、石橋、明治期の石造の三角測量点、道路元標などの地域に残る石造物
- ・古地名や故地の記録や農村集落の景観
- ・近世・近代の石工に関する古文書や採石道具などの歴史資料
- ・地域住民の交流の場となってきた水場や講などの民俗行事
- ・各地域で受け継がれる加西の伝統的な食文化
- ・旧家や寺院等に残る庭園
- ・加西の歴史や文化に関係する人物伝

以上、本節では、「①調査等で把握してきた歴史文化遺産」について概観した上で、そのうち、現在文化財の指定等を受けている「②指定等文化財」の概況を整理する。

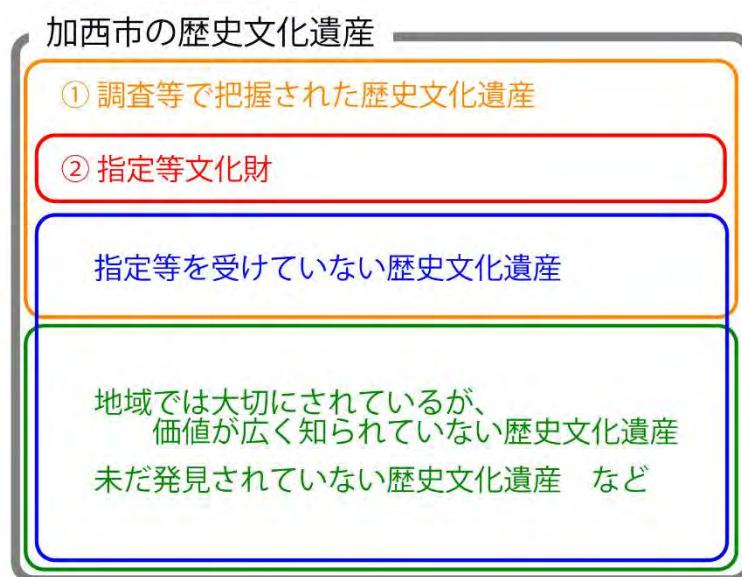


図2-25 加西市の歴史文化遺産と本節で概況を整理する歴史文化遺産の位置づけ

## ① 調査等で把握された歴史文化遺産

これまでの調査等で把握された歴史文化遺産は、表2-4に示す資料を用いて整理すると、合計100,365件にのぼる。その内訳は、古文書が98,440件と突出して多い。また、古文書以外を細分類で見ると、石造物が500件と最も多く、古墳・墳墓が396件、集落跡140件、神社128件、寺院118件と続いている。(表2-5参照)

表2-4 調査等で把握された歴史文化遺産の整理に用いた資料一覧

No.	資料名	発行年月日	編集・発行者
1	加西市史 第三巻(本編3)自然	平成14年9月	加西市史編さん委員会
2	加西市史 第四巻(本編4)文化財(美術・工芸)	平成15年3月	加西市史編さん委員会
3	加西市史 第五巻(本編5)文化財(建造物)	平成16年3月	加西市史編さん委員会
4	加西市史 第六巻(本編6)民俗	平成19年2月	加西市史編さん委員会
5	加西市史 別巻 加西の石仏	平成19年3月	加西市史編さん委員会
6	兵庫県の近代化遺産 —兵庫県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書	平成18年3月	兵庫県教育委員会
7	兵庫県の近代和風建築 —兵庫県近代和風建築総合調査報告書	平成26年3月	兵庫県教育委員会
8	兵庫の民家 一播磨地区調査概報一	昭和44年	兵庫県教育委員会
9	埋蔵文化財保護の手引き	平成23年度	兵庫県立考古博物館
10	史跡玉丘古墳群整備(修復)基本計画		加西市教育委員会
11	社会教育活動のあゆみ	平成28年度	加西市教育委員会
12	加西に捕虜がいた頃 一青野原収容所と世界一	平成28年3月	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター／加西市教育委員会
13	はじめての加西	平成27年3月	加西市文化遺産活用実行委員会
14	加西市デジタルミュージアム(祭り・伝統行事)	平成18年度	加西市
15	加西市北条地区歴史的景観形成地区景観ガイド ライン	平成24年度	兵庫県県土整備部まちづくり局都市政策課 景観形成室／加西市都市整備部都市計画課
16	加西市観光ガイドマップ(総合パンフレット)	平成20年3月	加西市観光まちづくり協会・加西市
17	かさい観光 Navi (加西市観光まちづくり協会ホームページ)	—	加西市観光まちづくり協会
18	鎌倉山行者道ハイキングマップ	平成21年4月	加西市観光まちづくり協会
19	黒田官兵衛24騎のひとり後藤又兵衛パンフレット	平成26年5月	加西市観光まちづくり協会
20	北条鉄道沿線散策マップ(北条駅周辺)	平成26年2月	加西市観光まちづくり協会
21	北条鉄道沿線散策マップ(長駅・播磨下里駅周辺)	平成26年2月	加西市観光まちづくり協会
22	北条鉄道沿線散策マップ(網引駅・田原駅周辺)	平成26年2月	加西市観光まちづくり協会
23	加西西国三十三ヶ所霊場めぐり	平成19年4月	加西市観光協会
24	加西市播磨国風土記の里と石仏と	平成28年3月	加西市播磨国風土記1300年祭実行委員会
25	カサイチ加西市サイクリングマップ	平成27年3月	加西市播磨国風土記1300年祭実行委員会
26	加西市まるごと30コース 播磨国風土記の里 加西ハイキングマップ	平成28年3月	加西市播磨国風土記1300年祭実行委員会
27	鶴野飛行場跡・防空壕探検ハイキングマップ	平成24年度	加西市歴史街道ボランティアガイド
28	玉丘史跡公園(玉丘古墳群)パンフレット	平成24年度	加西市玉丘史跡公園指定管理者(株清光社)
29	北播磨らしい景観 景観シート	平成29年3月	兵庫県北播磨県民局

表2-5 調査等で把握された歴史文化遺産の種類別件数

歴史文化遺産の種類			地区								合計	
			北条	富田	賀茂	下里	九会	富合	多加野	西在田		
建造物	建築物	寺院	19	10	12	20	15	6	17	7	12	118
		神社	19	11	23	14	20	7	18	7	9	128
		住宅	6	1	2	4	1		5	3	1	42
		鉄道	1		2	3	2					9
		その他	9		2	1	6	2	1		1	22
	石造物	64	36	64	98	70	63	52	15	31	500	
	土木構造物	3		2						1		7
美術工芸品	絵画				3							3
	彫刻	1		4	5	1				1		12
	工芸品	2				2				1		6
歴史資料	棟札	12	8	8	14	13	5	8	15	3	86	
	古文書	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98,440	
	その他	3	2		1	1	1	2			10	
説話や伝承	播磨国風土記	3	1			2	2	3	1	2	13	
	その他	2	1	3		1	1	1		1	10	
祭事・芸能		6	7	5	2	3	1	8	2	5	66	
行事・イベント	まちづくり		1			1					2	
	その他	2			1	1	4	1			12	
特産品	農産物			1							7	
	工芸品	1									2	
遺跡	散布地	5	10	6	24	11	16	7	5	10	93	
	集落跡	12	23	10	11	17	24	28	7	12	140	
	城館跡	3	3	3	4	3	4	12	3	11	42	
	寺社跡		5		12	2		3	1	1	24	
	生産遺跡	1	9	2	51	8	8	10	4	2	95	
	古墳・墳墓	64	56	35	23	80	67	13	14	67	396	
	戦跡等					2					2	
	その他		2	1		1		2		2	8	
名勝地	庭園				1	1		1		2	5	
自然環境	地形		3	3	1	4	1	2	1	1	19	
	動植物	1		1		2	1	3		3	15	
歴史的な町並み		3									3	
旧街道		7	3		1		1			1	7	
その他	観光施設			3		2	2		1	2	10	
	巡礼道	1				1		3			6	
	公園	1		1	1		1			1	5	
合計		251	192	193	295	273	217	200	89	180	100,365	

※資料間の重複を精査した合計を示しているため、各報告書・計画書等に掲載されている件数とは異なる。

※複数地域にまたがる文化財を1件として集計しているため、地域ごとの件数の合計件数と合計欄の件数とは異なる。

※地域を特定しないものが「建造物」に2件、「行事・イベント」に3件、「特産品」に7件、「自然環境」に7件、「巡礼道」に1件ある。これらは合計に追加している。

※場所が特定できなかったものが、「建造物」18件、「工芸品」に1件あり、これらは合計に追加している。また、古文書は、地区別集計を行っていないため、合計のみを示す。

これらの「調査等で把握された歴史文化遺産」のうち、これまでの加西市の観光パンフレット等に掲載してきた歴史文化遺産は表2-6のとおりである。これらは、加西市の歴史文化を代表する歴史文化遺産の一つであるといえ、今後の加西市における地域振興・観光振興等を推進していく際にも、重要な役割を担う歴史文化遺産であるといえる。

表2-6 これまでの観光パンフレット等に掲載してきた主な歴史文化遺産

歴史文化遺産の種類	地区	名称	
建造物	寺社	北条 酒見寺、羅漢寺、楽法寺、住吉神社、八坂神社	
		富田 高峰神社、八幡神社（谷口町）	
		賀茂 常行院	
		下里 一乗寺、多聞寺、古法華寺、王子神社	
		九会 周遍寺、見性寺、乎疑原神社、八幡神社（網引町）	
		多加野 普光寺、奥山寺、普明寺、日吉神社、八王子神社	
		西在田 東光寺、金剛院、礐崎神社（下道山町）	
		在田 久学寺、石部神社	
	民家他	北条 高井家住宅、水田家住宅	
		下里 播磨下里駅、法華口駅	
石造物	北条 五百羅漢、小谷石仏		
	賀茂 古法華石仏、常行院石造七重塔		
	下里 倉谷石仏		
	富合 山伏峠石棺仏		
	多加野 大日寺石仏群		
	土木構造物 北条・賀茂・下里・九会 北条鉄道		
説話や伝承	全域 播磨国風土記ゆかりの地		
	在田 女切峠		
祭事・芸能	北条 北条節句祭り、五百羅漢の千灯会		
	富田 高峰神社の大祭		
	賀茂 古法華春祭り		
	九会 八幡神社（網引町）の獅子舞、乎疑原神社の春祭り		
	多加野 日吉神社の秋祭り、日吉神社の御田植祭		
	在田 石部神社の秋祭り		
	西在田 東光寺の田遊び・鬼会		
遺跡	城館跡	北条・在田 小谷城跡	
		賀茂 山下城跡	
		下里 善防山城	
		多加野 河内城跡	
	寺社跡 富田 吸谷廃寺跡		
	古墳・墳墓	北条・富合・在田 玉丘古墳群／玉丘史跡公園	
		下里 後藤山古墳	
	戦跡等 九会 鶴野飛行場跡、地下指揮所跡		
	その他 西在田 奥野将監屋敷跡		
自然環境	地形	富田 ゆるぎ岩、鏡岩	
		賀茂 笠松山	
		下里 善防山	
		多加野 鎌倉山	
		西在田 不動の滝	
	動植物	九会 あびき湿原、網引駅の大イチョウ	
		在田 石部神社門杉、殿原町の御葉付イチョウ	
		— コハクチョウ／白鳥の飛来地	
	ため池	下里 皿池（戸田井町）	
		九会 上池・下池（網引町）、水正池（上宮木町）	
		富合 長倉池（玉丘町）	
歴史的な町並み			
生業			
生業	賀茂 長石採石場、長池のブドウ畠		
	下里 富久錦		
その他		古法華自然公園	

※加西市域全域を対象とした観光パンフレットである「加西市観光ガイドマップ」、「はじめての加西」、「播磨国風土記の里/加西ハイキングマップ」、「カサイチ/加西市サイクリングマップ」、北播磨地域の観光パンフレット「北はりま/みちくさマップ」、並びに、「北播磨らしい景観/景観シート」（兵庫県北播磨県民局加東土木事務所まちづくり建築課）にあげられている歴史文化遺産を抽出した。

## ② 指定等文化財

平成 30 年（2018）3 月現在の文化財の指定等の件数は、表 2-7 のとおりである。合計 97 件を文化財に指定等しており、指定では、国指定が 18 件、県指定 26 件、市指定が 47 件、登録では、国登録が 5 件、県登録が 1 件である。種別では、建造物の指定が 33 件と最も多く、考古資料の 22 件と続いており、建造物のうち 15 件は石造の五輪塔・宝篋印塔等、考古資料のうち 13 件は石仏・石造建造物等であり、石造物が多く指定されていることにも、古くからの石材の産出地として、石の文化を育んできた加西市の歴史文化の特徴の一端をうかがうことができる。指定等文化財の分布は図 2-26、一覧は表 2-8～表 2-15 のとおりである。

表 2-7 指定等文化財の件数一覧（平成 29 年 7 月 5 日現在）

種別	国	県	市	国	県	計
有形文化財	建造物	7 (うち国宝1)	10	10	5	1 33
	絵画	3 (うち国宝1)				3
	彫刻	5		6		11
	工芸品	1	2	1		4
	考古資料		9	13		22
	古文書			1		1
民俗文化財	有形民俗文化財			4		6
	無形民俗文化財	1	1			
記念物	史跡		1	3	5	9
	名勝				3	3
	天然記念物			1	4	5
計		18	26	47	5	1 97

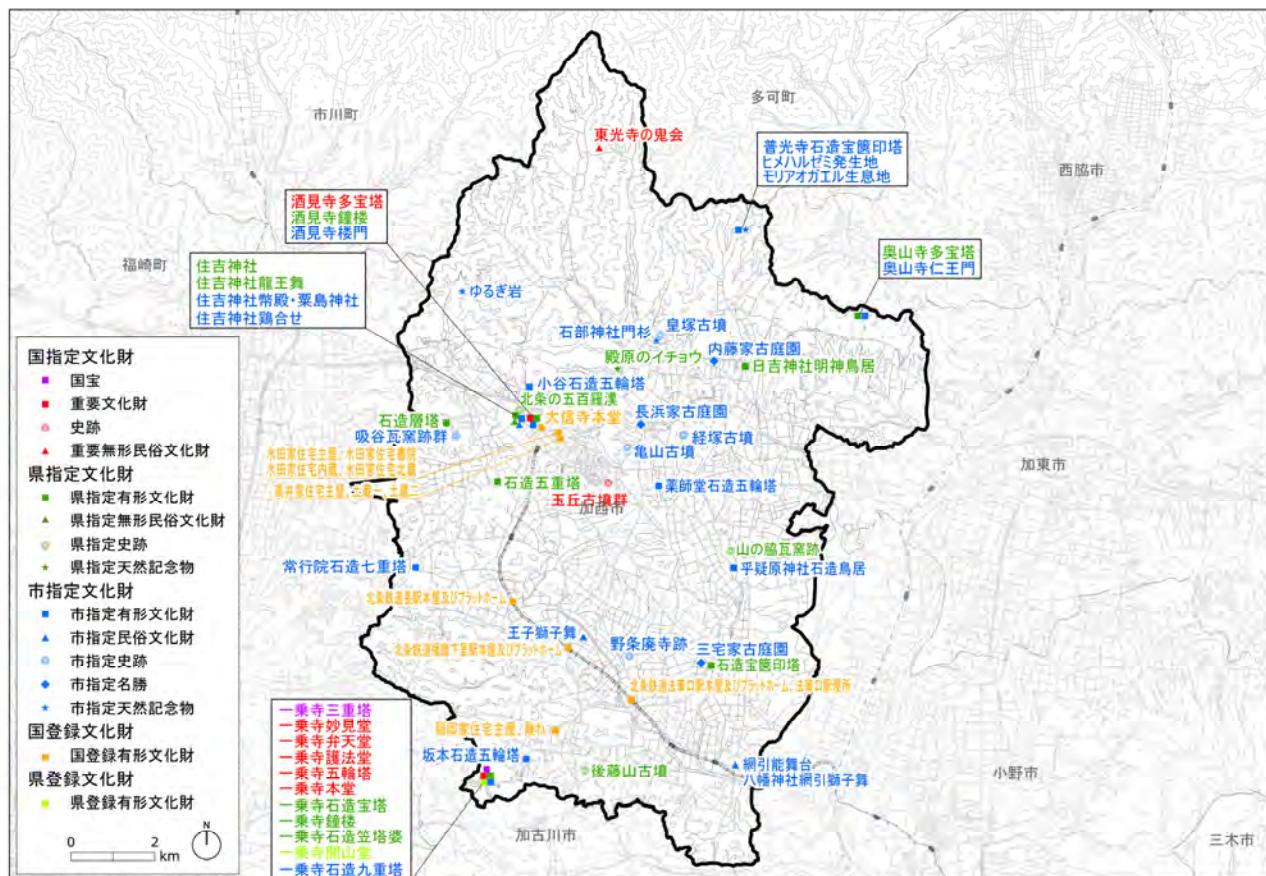


図 2-26 指定等文化財の分布（美術工芸品を除く）

表 2-8 国指定文化財

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
1	一乗寺三重塔	国宝 建造物(寺社建築)	明治34年3月27日 昭和27年3月29日	一乗寺	坂本町
2	一乗寺妙見堂	重要文化財 建造物(寺社建築)	大正2年4月14日 昭和25年8月29日	一乗寺	坂本町
3	一乗寺弁天堂	重要文化財 建造物(寺社建築)	大正2年4月14日 昭和25年8月29日	一乗寺	坂本町
4	一乗寺護法堂	重要文化財 建造物(寺社建築)	大正2年4月14日 昭和25年8月29日	一乗寺	坂本町
5	一乗寺五輪塔	重要文化財 建造物(寺社建築)	昭和28年8月29日	一乗寺	坂本町
6	酒見寺多宝塔	重要文化財 建造物(寺社建築)	昭和50年6月23日	酒見寺	北条町北条
7	一乗寺本堂	重要文化財 建造物(寺社建築)	昭和58年12月26日	一乗寺	坂本町
8	絹本著色聖徳太子及天台高僧像	国宝 美術工芸品(絵画)	明治34年8月2日 昭和28年3月31日	一乗寺	坂本町
9	絹本著色阿弥陀如来像	重要文化財 美術工芸品(絵画)	明治41年4月23日	一乗寺	
10	絹本著色五明王像	重要文化財 美術工芸品(絵画)	明治41年4月23日	一乗寺	
11	銅造聖観音立像	重要文化財 美術工芸品(彫刻)	明治34年8月2日	一乗寺	
12	木造法道仙人立像 (開山堂安置)	重要文化財 美術工芸品(彫刻)	昭和15年10月14日	一乗寺	
13	木造僧形坐像	重要文化財 美術工芸品(彫刻)	昭和15年10月14日	一乗寺	
14	石造浮彫如来及両脇侍像	重要文化財 美術工芸品(彫刻)	昭和36年6月30日	西長町外7町共有	西長町
15	銅造觀音菩薩立像	重要文化財 美術工芸品(彫刻)	昭和60年6月6日	一乗寺	
16	太刀 銘国安	重要文化財 美術工芸品(工芸品)	昭和13年7月4日	個人蔵	
17	玉丘古墳群	史跡	昭和18年9月8日 昭和53年9月18日 昭和63年1月20日	加西市	玉丘町 北条町古坂
18	東光寺の鬼会	重要無形民俗文化財	平成18年3月15日	東光寺追儺式及び田遊び保存会	上万願寺町

表 2-9 県指定文化財(その1)

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
1	一乗寺鐘楼	有形文化財 建造物(寺社建築)	昭和43年3月29日	一乗寺	坂本町
2	酒見寺鐘楼	有形文化財 建造物(寺社建築)	昭和47年3月24日	酒見寺	北条町北条
3	奥山寺多宝塔	有形文化財 建造物(寺社建築)	平成12年5月2日	奥山寺	国正町
4	住吉神社	有形文化財 建造物(寺社建築)	平成29年3月14日	住吉神社	北条町北条
5	石造層塔	有形文化財 建造物(石造物)	昭和38年4月19日	吸谷町	吸谷町
6	日吉神社明神鳥居	有形文化財 建造物(石造物)	昭和47年3月24日	日吉神社	和泉町
7	一乗寺石造宝塔	有形文化財 建造物(石造物)	昭和48年3月9日	一乗寺	坂本町

表2-10 県指定文化財（その2）

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
8	一乗寺石造笠塔婆	有形文化財 建造物（石造物）	昭和48年3月9日	一乗寺	坂本町
9	石造五重塔	有形文化財 建造物（石造物）	昭和50年3月18日	坂元町	坂元町
10	石造宝篋印塔	有形文化財 建造物（石造物）	昭和50年3月18日	清慶寺	中野町
11	酒見寺梵鐘	有形文化財 美術工芸品（工芸品）	昭和47年3月24日	酒見寺	北条町北条
12	東光寺梵鐘	有形文化財 美術工芸品（工芸品）	昭和47年3月24日	東光寺	上万願寺町
13	一乗寺三重塔古瓦	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和38年4月19日	一乗寺	坂本町
14	石棺蓋石	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和47年3月24日	玉野町	玉野町
15	日吉神社境内出土御正躰群	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和47年3月24日	日吉神社	池上町
16	天神山瓦窯跡出土古瓦（I）	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和47年3月24日	加西市	北条町古坂
17	天神山瓦窯跡出土古瓦（II）	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和48年3月9日	乎疑原神社	繁昌町
18	播磨法華山坂本磚仏	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和48年3月9日	個人	坂本町
19	清慶寺板碑	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和51年3月23日	清慶寺	中野町
20	鎮岩板碑	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	昭和51年3月23日	加西市	北条町古坂
21	江ノ上経塚出土品	有形文化財 美術工芸品（考古資料）	平成8年3月22日	加西市	北条町横尾
22	住吉神社龍王舞	無形民俗文化財	昭和52年3月29日	住吉神社鷄合せ 龍王舞保存会	北条町北条
23	後藤山古墳	史跡	昭和47年3月24日	個人	倉谷町
24	山の脇瓦窯跡	史跡	昭和47年3月24日	個人	繁昌町
25	北条の五百羅漢	史跡	平成30年3月20日	五百羅漢保 存委員会	北条町北条
26	殿原のイチョウ	天然記念物	昭和47年3月24日	殿原町	殿原町

表2-11 市指定文化財（その1）

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
1	奥山寺仁王門	有形文化財 建造物（寺社建築）	昭和53年3月17日	奥山寺	国正町
2	酒見寺楼門	有形文化財 建造物（寺社建築）	昭和53年3月17日	酒見寺	北条町北条
3	住吉神社幣殿・粟島神社	有形文化財 建造物（寺社建築）	平成28年5月23日	住吉神社	北条町北条
4	小谷石造五輪塔	有形文化財 建造物（石造物）	昭和46年3月30日	小谷区	北条町小谷
5	薬師堂石造五輪塔	有形文化財 建造物（石造物）	昭和46年3月30日	玉野町	玉野町
6	一乗寺石造九重塔	有形文化財 建造物（石造物）	昭和47年3月25日	一乗寺	坂本町

表2-12 市指定文化財（その2）

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
7	坂本石造五輪塔	有形文化財 建造物(石造物)	昭和47年3月25日	一乗寺	坂本町
8	常行院石造七重塔	有形文化財 建造物(石造物)	昭和49年3月25日	常行院	山下西町
9	普光寺石造宝篋印塔	有形文化財 建造物(石造物)	昭和49年3月25日	普光寺	河内町
10	乎疑原神社石造鳥居	有形文化財 建造物(石造物)	昭和55年5月16日	乎疑原神社	繁昌町
11	乎疑原神社石造五尊像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	昭和60年6月26日	乎疑原神社	繁昌町
12	阿弥陀如来坐像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	平成21年3月23日	周遍寺	網引町
13	阿弥陀如来坐像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	平成22年3月19日	金剛院	上万願寺町
14	不動明王立像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	平成22年3月19日	個人蔵	西長町
15	大日如来坐像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	平成23年3月25日	大日堂	鎮岩町
16	二天立像 右 持国天像 左 多聞天像	有形文化財 美術工芸品(彫刻)	平成23年3月25日	大日堂	鎮岩町
17	乎疑原神社梵鐘	有形文化財 美術工芸品(工芸品)	昭和55年5月16日	乎疑原神社	繁昌町
18	大村石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和43年3月30日	大村町	大村町
19	倉谷石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和43年3月30日	倉谷町	倉谷町
20	吸谷廃寺礎石並びに出土古瓦	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和44年3月31日	吸谷町	吸谷町
21	小谷石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和46年3月30日	小谷区	北条町小谷
22	薬師堂板碑	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和46年3月30日	玉野町	玉野町
23	長圓寺板碑	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日	長圓寺	福居町
24	腰折地蔵	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日	市村町	市村町
25	上宮木石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日	上宮木町	上宮木町
26	玉野石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日	玉野町	玉野町
27	春岡寺石仏	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日	春岡寺	池上町
28	大日寺石仏群	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	昭和47年3月25日 平成16年6月4日	大日寺	野上町
29	亀山古墳副葬品埋納施設出土遺物	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	平成23年3月25日	加西市	北条町古坂
30	普光寺 瓦質燈籠	有形文化財 美術工芸品(考古資料)	平成23年12月26日	普光寺	河内町
31	吉野村歳之当条目	有形文化財 美術工芸品(古文書)	平成19年10月25日	吉野町	吉野町
32	網引能舞台	民俗文化財	昭和53年3月17日	網引町・南網引町	網引町
33	住吉神社鶴合せ	民俗文化財	昭和48年3月20日	住吉神社鶴合せ 龍王舞保存会	北条町北条

表 2-13 市指定文化財（その3）

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
34	八幡神社網引獅子舞	民俗文化財	昭和 48 年 3 月 20 日	網引獅子舞保存会	網引町
35	王子獅子舞	民俗文化財	昭和 55 年 5 月 16 日	王子獅子舞保存会	王子町
36	亀山古墳	史跡	昭和 43 年 3 月 30 日	笛倉町	笛倉町
37	経塚古墳	史跡	昭和 43 年 3 月 30 日	個人	中富町
38	野条廃寺跡	史跡	昭和 43 年 3 月 30 日	加西市	野条町
39	吸谷瓦窯跡群	史跡	昭和 44 年 12 月 27 日	個人	吸谷町
40	皇塚古墳	史跡	昭和 46 年 3 月 30 日	石部神社	上野町
41	内藤家古庭園	名勝	平成 4 年 3 月 24 日	個人	満久町
42	長浜家古庭園	名勝	平成 4 年 3 月 24 日	個人	笛倉町
43	三宅家古庭園	名勝	平成 5 年 4 月 9 日	個人	中野町
44	モリアオガエル生息地	天然記念物	昭和 44 年 3 月 31 日	普光寺	河内町
45	石部神社門杉	天然記念物	昭和 45 年 5 月 1 日	石部神社	上野町
46	ゆるぎ岩	天然記念物	昭和 46 年 3 月 30 日	畠町	畠町
47	ヒメハルゼミ発生地	天然記念物	昭和 49 年 12 月 1 日	普光寺	河内町

表 2-14 国登録文化財

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
1	稻岡家住宅主屋、離れ	有形文化財 建造物（民家）	平成 17 年 7 月 12 日	個人	三口町
2	高井家住宅主屋、土蔵一、土蔵二	有形文化財 建造物（民家）	平成 18 年 3 月 2 日	個人	北条町横尾
3	水田家住宅主屋、水田家住宅書院、水田家住宅内蔵、水田家住宅北蔵	有形文化財 建造物（民家）	平成 22 年 4 月 28 日	個人	北条町横尾
4	大信寺本堂	有形文化財 建造物（寺社建築）	平成 22 年 4 月 28 日	大信寺	北条町北条
5	北条鉄道法華口駅本屋及びプラットホーム、北条鉄道法華口駅便所、播磨下里駅本屋及びプラットホーム、長駅本屋及びプラットホーム	有形文化財 建造物（その他）	平成 26 年 4 月 25 日	北条鉄道株式会社	東笠原町他

表 2-15 県登録文化財

No.	名称	指定等種別	指定年月日	所有者 (管理者)	所在地
1	一乗寺開山堂	有形文化財 建造物（寺社建築）	平成 25 年 3 月 7 日	一乗寺	坂本町

## 2-2. 加西市の歴史文化の特徴

2-1の「歴史文化の成り立ち」の整理を踏まえ、加西市の歴史文化の特徴は、次のように整理できる。

加古川や市川へはいくつかのルートが開けて瀬戸内海や日本海とつながり、近世の北条に集まる街道筋などを介して、京都や大阪、姫路などの政治・文化の中心的な地域をはじめとした多くの地域との交流が繰り広げられてきた。

加西市は、畿内に近い大国播磨に位置することから、早くから高度な仏教文化が花開き、播磨六力寺である一乗寺、普光寺や、酒見講の中心となった酒見社（住吉神社・酒見寺）が位置するなど、播磨国における法会などの中で重要な役割を担ってきた。また、瀬戸内海臨海部にほど近い内陸に、利用しやすい平地・台地状の広がりをもつという好条件のもとに、臨海部における政治や産業、軍事の拠点を支える後背地としての役割を担い、わが国の歴史の重要な断片を構成してきた。

一方で、北に多可郡との境界をなす山々がそびえ、東に青野ヶ原台地、西や南も山によって区切られた加西市では、人々は限られた土地に自然への信仰と生活の場を築き、地域内で産する石材を用いた石棺を古墳に埋葬し、さらには石棺を石仏等に転用したり、数多くのため池を築いて耕作地を整えるなど、各時代を通じて豊かな自然の恵みを大切にかつ巧みに使いこなしてきた。また、近世の非領国型支配の中においても自治の精神を育み、人と人との絆を深めながら、村の祭礼・行事等を大切に受け継いできた。

このように、多様な交流を通じて、他地域の文化を取り入れながら発展し続け、コンパクトな地形的まとまりの中で、さまざまなひと・もの・こと（歴史文化遺産）が有機的に関係し合う個性豊かな歴史文化を育んできた。

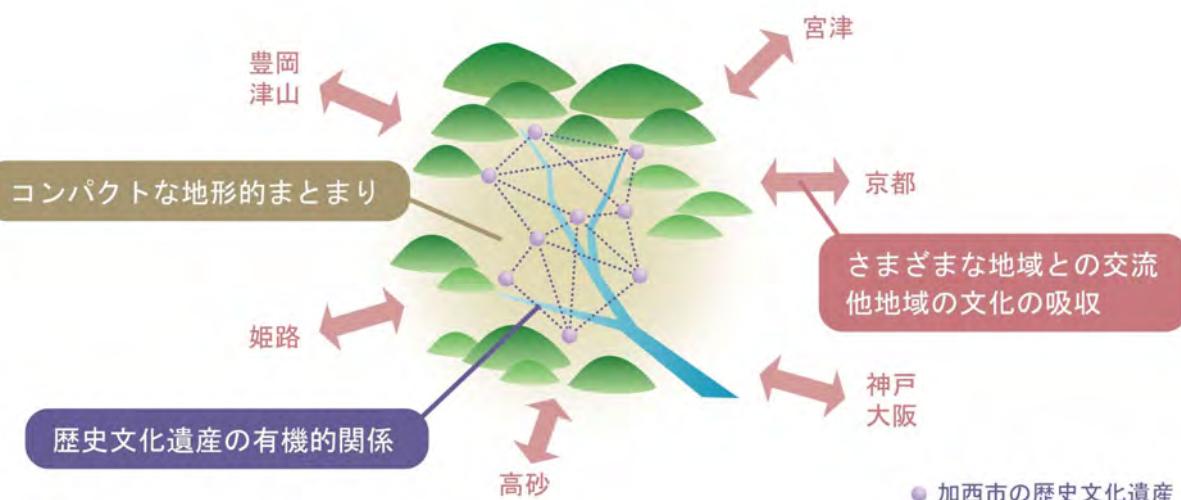


図2-27 加西市の歴史文化の特徴（概念図）

## 2－3. 歴史文化を活かしたまちづくりの取り組み経緯

### (1) 保存

#### ア 文化財の指定等

明治 30 年（1897）に、わが国における文化財保護に係る最初の法律として、古社寺の建造物及び宝物類を対象とした「古社寺保存法」が制定されると、明治 34 年（1901）3 月に一乗寺塔婆（三重塔）が「特別保護建造物」に、同年 8 月に絹本著色聖徳太子及天台高僧像、銅造聖観音立像が、明治 41 年（1908）4 月には、絹本著色阿弥陀如来像、絹本著色五明王像が「国宝」に、また、大正 2 年（1913）4 月には、一乗寺の妙見堂、弁天堂、護法堂が「特別保護建造物」に指定された。これらは、昭和 4 年（1929）の「国宝保存法」の「国宝」へと引き継がれた。その後も同法のもとに木造法道仙人立像、木造僧形坐像が「国宝」に指定されてきた。

一方、遺跡や名勝地などについては、大正 8 年（1919）に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定されると、加西郡でも古墳を中心に調査が進められた。中でも玉丘古墳は、大正 14 年（1925）に県の補助を受けて碑文が建設された後、昭和 6 年（1931）に京都大学梅原末治氏によって現地調査が実施され、昭和 18 年（1943）9 月に史蹟に指定された。

戦後の昭和 25 年（1950）、「国宝保存法」と「史蹟名勝天然紀念物保存法」を廃止・統合して、現在の「文化財保護法」が制定され、旧法による指定物件は、文化財保護法に基づく文化財指定へと引き継がれた。その後も、隨時、文化財保護法は改正され、地方公共団体による文化財保護制度の創設、新たな文化財種別の追加や登録制度の創設など、文化財保護行政の拡充が図られるなかで、加西市においても着実に指定等の件数を増やし、平成 29 年（2017）7 月 5 日現在、98 件の指定等を数える。（2-1(3)イ参照）

近年では、平成 24 年（2012）にひょうごヘリテージ機構（兵庫県ヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）建築部門）が調査を実施した北条鉄道の木造駅舎三駅（法華口駅、播磨下里駅、長駅）が、平成 26 年（2014）4 月に国登録有形文化財に登録された。また、平成 28 年（2016）5 月には住吉神社幣殿・粟島神社を市指定有形文化財に指定、平成 29 年（2017）3 月には、住吉神社（東本殿・中本殿・西本殿・拝殿・石積基壇・白鬚神社・手水舎）が県指定重要有形文化財に指定、平成 30 年（2018）3 月には、北条の五百羅漢が県指定史跡に指定された。

これらの指定等を受けた文化財については、法・条例に基づき適切な保存の措置を講じてきた。また、特に重要文化財建造物の防災対策のため、毎年 1 月 26 日の文化財防火デー付近の日曜日には、酒見寺と法華山一乗寺において防火訓練を実施している。

#### イ 文化財指定以外の取り組み

加西市の中心市街地である北条地区は、古くは門前町として、江戸時代には丹波街道など 6 本の街道が往来する交通の要所として栄え、宿場町の賑わいを見せていましたが、東部新市街地への都市機能の移転や人口重心の移動などを背景に、空き店舗、空き家が多くなり、歴史的建造物が取り壊され駐車場に変わることで、歴史的景観資源の喪失が進行していました。このような状況の改善を図るべく、加西市では、地域住民主体のまちづくりに取り組んできた「北条まちづくり協議会」と連携し、旧市街地における歴史



播磨下里駅



法華山一乗寺防火訓練

的景観資源等の活用やまちなみ保全等に向けた景観まちづくりに取り組んできた。平成 22 年（2010）からは、「景観の形成等に関する条例」（兵庫県）に基づく歴史的景観形成地区の指定を目指し、学識経験者やヘリテージマネージャー等の協力のもと、景観まちづくり学習会や検討会を重ねて景観デザインルールを検討し、平成 24 年（2012）4 月には「北条地区歴史的景観形成地区」に指定された。この地区指定により、北条地区では、建築物・工作物の建築等の届出制度によって、歴史的な町並みの保全が図られている。また、平成 22 年（2010）3 月には高井家住宅（北条町横尾）、平成 28 年（2016）3 月には水田家住宅（北条町横尾）が、「景観の形成等に関する条例」（兵庫県）に基づく景観形成重要建造物に指定され、保存されている。

一方、自然環境では、普光寺の照葉樹林が市指定天然記念物（モリアオガエル生息地・ヒメハルゼミ発生地）に加えて、自然環境保全地域に指定されて保全されている。また、市域南部の法華山地の一帯は、播磨中部丘陵県立自然公園に指定されて保全されている。また、特に、同区域内のあびき湿原では、地域住民によりあびき湿原保存会が組織され、湿原の保全を目的とした間伐や下刈り作業に取り組む一方、子どもから大人までが楽しむことができる観察会なども開催しており、このような活動が評価されて、（公社）兵庫県緑化推進協会から「ひょうご森づくり活動賞」を受賞している。



あびき湿原保存会による  
里山管理活動

この他にも、多くの町・区において、祭礼・行事の継承や寺社や堂・祠などの清掃等に取り組んでおり、建物や用具の老朽化等を背景に補修・修繕などを行う町・区も見られるなど、各町・区においても歴史文化遺産の保存・継承に向けた取り組みが続けられている。また、五百羅漢保存会、東光寺追儻式及び田遊び保存会、鶴野平和祈念の碑苑保存会、加西石造文化研究会、加西郷土研究会などの市民団体も組織され、加西市の歴史文化や歴史文化遺産の保存に取り組んでいる。

## （2）調査・研究

### ア 埋蔵文化財

昭和 29 年（1954）の文化財保護法の改正により、土木工事に伴う事前届出制度を定めた埋蔵文化財の保護のための制度が定められた。昭和 35～37 年（1960～1962）の文部省文化局文化財保護委員会（現文化庁）による全国的な埋蔵文化財包蔵地の分布調査の結果を踏まえて「全国遺跡地図」が発行され、その後、地方公共団体による分布調査遺跡地図の発行等が進められていくこととなる。

播磨平野の中央部に位置する加西市は、昔から風水害が少なく温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれたことから、数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。現在、加西市の周知の埋蔵文化財包蔵地は計 823 件（集落跡 185、古墳 417、生産遺跡 142、寺社跡 36、城館跡 37、条里 4、祭祀跡 2）を数える。埋蔵文化財の発掘調査は、史跡玉丘古墳群の整備のための調査を除くと、そのほとんどが宅地開発や道路建設、下水道工事などの開発や工事に伴う調査であり、近年は、年間約 10 件程度を実施している。

### イ テーマごとの調査

兵庫県教育委員会では、平成 13 年度の農村舞台調査や平成 15～17 年度の近代化遺産（建造物）調査、平成 23～平成 25 年度の近代和風建築総合調査、平成 24～26 年度の広域に所在する文化財群の調査と活用に向けた播磨国風土記関連文化財群の調査などが実施してきた。また、県の景観部局では、

平成 18 年度に建造物や町並み等の景観資源発掘調査を実施するなど、文化財部局以外の景観や自然環境などの関連する分野・テーマからの歴史文化遺産の調査も実施されてきた。

また、市民団体等においても、「加西石造文化研究会」による異形石仏等の研究、上谷氏や「鶴野平和祈念の碑苑保存会」による鶴野飛行場跡関連の歴史文化遺産の調査研究、「野上町文化財保存会」による野上町の歴史文化遺産の調査（平成 27 年（2015）に『野上町のむかしと今』を発行）など、それぞれの活動テーマに沿った調査研究並びにその成果を活かした活用の取り組みが進められている。

加西市においても、歴史文化遺産のほりおこしや実態の把握、価値の解明に向けて、これまで数多くの調査研究を実施してきた。中でも近年は、加西市の歴史文化の特徴である「戦跡」「祭礼」「石造物」をテーマとした調査を進めており、その内容は次のとおり概観できる。

### ① 戦跡

第二次世界大戦後 70 年余が経過し、戦争を体験した人々が少なくなる中、戦跡を保存・活用して戦争の悲惨さ、平和の大切さを語り継ぐとともに、地域の開発を推進するため、平成 20~23 年度に、鶴野飛行場跡地の活用検討に向けた調査を実施した。鶴野飛行場跡については、十数年来、地元住民を中心となる「鶴野平和祈念の碑苑保存会」が結成され、調査活動等が地道に行われていたこと、また、鶴野飛行場跡の一画に神戸大学農学部附属食資源教育研究センターが所在し、構内に数多くの基地施設が遺存していることから、加西市教育委員会では、保存会の調査成果等を参考にするとともに、神戸大学大学院人文科学研究科との共同研究として、鶴野飛行場跡を歴史文化遺産として再評価するための学術的な基礎調査（鶴野飛行場関係歴史遺産基礎調査）を実施した。平成 22 年度には、市觀光部局による鶴野飛行場跡をめぐる「戦争遺産バスツアー」の企画など、戦跡を観光資源として活用していく取り組みなども実施し、平成 23 年（2015）3 月には、基礎調査の成果をとりまとめて『加西・鶴野飛行場跡』を発行した。



鶴野飛行場関係歴史遺産  
基礎調査の様子

一方、平成 27 年（2015）は、第一次世界大戦の大正 4 年（1915）に開設された青野原俘虜収容所の 100 周年にあたることから、加西市では、青野原俘虜収容所開設 100 周年事業として、資料展示や講演会、記念ウォークなどを実施した。その一環として、神戸大学大学院人文科学研究科への委託研究として資料調査等を実施し、平成 28 年（2016）3 月には、それらの成果等をとりまとめた冊子『加西に捕虜がいた頃—青野原収容所と世界—』を発行し、さらに、同書のドイツ語版も作成して市ホームページに掲載している。

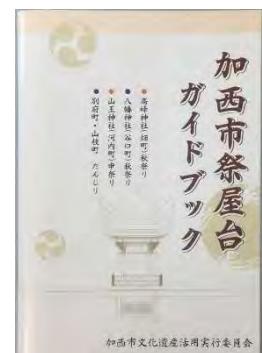
### ② 祭礼

平成 23 年度には、北条節句祭活性化事業として、関連する各種市民団体の代表者と加西市とで構成する加西市歴史文化遺産活用活性化実行委員会により、北条節句祭の歴史や神事、各町の屋台等についての調査を実施し、平成 24 年（2012）3 月に『北条節句祭ガイドブック』を発行した。

また、平成 26 年度には、加西郷土研究会やヘリテージマネージャーと加西市が共同で、高峰神社（畠町）秋祭り、八幡神社（谷口町）秋祭り、山王神社（河内町）申祭りの各祭りと屋台、別府町と山枝町のだんじりについての調査を行い、平成 27 年（2015）3 月に『加西市祭屋台ガイドブック』を発行した。

### ③ 石造物

加西市の石造物については、古くから調査が進められてきたが、それらの成果をとりまとめ、平成 19



『加西市祭屋台  
ガイドブック』

年（2007）3月に、『加西市史』の別巻『加西の石仏』を発行した。同書では、加西市内の石仏・板碑に加え、層塔・宝塔・五輪塔・宝篋印塔・笠塔婆・鳥居といった石造建造物の計107件を個別に解説している。

平成28年度には、近世期の丸彫り地蔵菩薩立像の悉皆調査およびデータベース化を実施するとともに、五百羅漢石仏の総合的な調査を実施し『羅漢寺石仏群（五百羅漢）調査報告書』を作成した。

## ウ 郷土史の研究

明治時代、近代化・産業化によって郷土が大きく変貌していく。これに対して記録を残そうとする意識が強くなり、全国的に郷土史、地方史の執筆が進められた。加西郡では、明治時代の終わりから『加西郡誌』の編さんが進められ、昭和4年（1929）7月の昭和天皇の御大典記念として『加西郡誌』が発行された。また、昭和19年（1944）には『北條町志』も発行された。

また、その後も各地域の郷土史家等による郷土史・地域史の研究が進められた。「加西郷土研究会」では、播磨地域の古文書研究等を進め、昭和32年（1957）創刊の『播磨郷土研究』は、平成27年（2015）に第30号を発行している。また、各地域の地域史では、昭和54年（1979）の『河内の里』（加西市河内町編）、平成元年（1989）の『桑原田町のあゆみ 桑原田町史』（菅野重雄編）、平成3年（1991）の『多加野の庄』（小川賢編）なども発行されている。また、平成27年（2015）には、野上町文化財保存会と神戸大学、加西市教育委員会による共同調査の成果を踏まえ『野上町のむかしと今 野上町歴史遺産ガイドブック』を発行している。

市制30周年を機に、平成9年（1997）から『加西市史』の編さんを開始した。編さんにあたっては、加西市史編さん委員会のもとに、「考古」「古代史」「中世史」「近世史」「近現代史」「文化財」「自然」「民俗」の8専門部会を設置して、それぞれ専門分野の委員が調査・執筆にあたった。また、調査・執筆作業の進捗に合わせて、「加西市史編さん委員会だより」を発行して、情報提供・成果報告等を随時実施しながら発行に向けた作業が進められた。

平成14年（2002）9月の『加西市史 第三巻（本編3）自然』の発行を皮切りに、各巻の発行が順次進められ、平成23年（2011）3月に最終となる『加西市史 第二巻（本編2）近世・近現代』を発行し、『加西市史』全10巻の発行が完了した。この発行完了に先立ち、歴史文化遺産と史料の活用や今後の郷土史研究における行政の役割について考えるため、平成22年（2010）11月には、『加西市史』刊行完了記念シンポジウムを開催した。『加西市史』の編さんにより、市域の歴史文化遺産がまとめられ、今後の文化財保存活用の基礎となった。一方、今後の研究が必要な歴史文化遺産も抽出されている（34頁参照）。また、補足調査として平成28年度に未実測建造物の測量調査、宇仁地区の仏像調査が実施された。

## （3）活用

### ア 遺跡の整備

#### ① 史跡玉丘古墳群

玉丘古墳は、昭和18年（1943）に史蹟に指定された後、昭和53年（1978）には陪塚2基のほか、筒塚古墳、マンジュウ古墳、逆古墳、北山古墳、壇塔山古墳、クワンス塚古墳、実盛塚古墳の計9基が追加指定され、玉丘古墳群として国指定史跡となった。その後、史跡指定地の公有化や発掘調査が進められる一方で、住宅建設など急速な都市化の波が押し寄せ、周辺では区画整理事業等も進められた。これに伴い、玉丘古墳群を背景として活用した歴史豊かな文化の薫る公園を整備する計画が浮上した。加

西市では、平成 5 年度に「玉丘古墳等整備基本計画」、平成 6 年（1994）に「文化公園（玉丘史跡公園）基本計画」を策定し、平成 7 年度から平成 12 年度にかけて玉丘史跡公園整備事業が実施された。公園整備事業に伴い、平成 6 年度に玉丘古墳及び陪塚 1・2 号墳の史跡外の隣接地、平成 7 年度にクワーンス塚古墳の墳丘部から外堤部、平成 10 年度に壇塔山古墳の墳丘部の確認調査が実施され、平成 6 年（1994）に玉丘古墳の一部・クワーンス塚古墳、平成 7 年（1995）に玉丘古墳の一部・陪塚 1 号墳・2 号墳・逆古墳・壇塔山古墳、平成 9 年（1997）に実盛塚古墳・北山古墳の一部、平成 11・12 年（1999・2000）に北山古墳の一部の公有化が図られ、貴重な歴史文化遺産である玉丘古墳群の一体的な保全が図られるようになった。



玉丘史跡公園

平成 18 年（2006）2 月には「玉丘古墳群史跡整備計画案」を作成し、玉丘史跡公園内に所在する玉丘古墳とクワーンス塚古墳、玉丘史跡公園外に所在する笹塚古墳とマンジュウ古墳の整備活用についての基本的な考え方・整備方針・課題を挙げ、将来策定する「史跡玉丘古墳群整備基本計画」において検討するものと位置付けた。平成 28 年（2016）3 月に、「玉丘古墳等整備基本計画」並びに「玉丘古墳群史跡整備計画案」を受けて、史跡玉丘古墳群の中で、特に整備（修復）の緊急度の高い古墳について、整備（修復）、管理、運営を推進していくため、本市が取り組むべき基本的な方向を示す計画として「史跡玉丘古墳群整備（修復）基本計画」を策定した。

## ② 鶴野飛行場跡

第二次世界大戦中に、旧姫路海軍航空隊の飛行士養成のための訓練基地として造られた鶴野飛行場やその周辺には、滑走路や防空壕などの基地施設が数多く残り、地域の開発と保存活用が行政課題のひとつとなってきた。平成 18 年度に策定した加西市第 1 次改革マニフェストには「鶴野飛行場跡地の有効活用」をとりあげ、平成 19 年度には、当時、滑走路跡地を管理していた防衛省に払下げの要望をあげた。払下げに向けた調整を進める一方で、跡地利用についての市民提案や官学連携による東洋大学からの提言などを受けるとともに、地域住民との勉強会、隣接する神戸大学農学部や企業と意見交換を重ねてきた。

平成 28 年（2016）2 月に用途廃止手続きが終わり、所有権や管理権などが財務省へ移ると、同年 6 月 16 日、国有財産近畿地方審議会で加西市への売却が適当との答申が出され、同月、払下げ手続きが完了した。

これを受け、加西市では、地域住民の意見を聴きながら、鶴野飛行場跡地及び周辺を戦争遺産としての観光・平和学習施設や防災拠点、地域住民の憩いの場として整備するための整備計画を検討し、（仮称）鶴野ミュージアムと地域活性化施設（道の駅）を併設した拠点施設を整備するとともに、「防災ゾーン」「レクリエーションゾーン」「歴史遺産群ゾーン」の 3 つのゾーンに分けて整備する方針を出した。

## ③ 城跡

山下城跡保存会では、山下城跡の木竹を伐採して、遊歩道や本丸跡への東屋を整備しており、下里地区ふるさと創造会議では、善防山城が位置する善防山の登山コースを整備して、看板を設置するなど、各種補助金を活用しながら、地域が主体となって城跡の活用のためのさまざまな整備を進めている。



山下城跡の憩いの広場

## イ 学習講座・講演会等

加西市では、平成 20 年（2008）3 月の『加西市史 第一巻（本編 1）考古・古代・中世』の発行後、同年 11 月から平成 29 年（2017）12 月まで毎月 1 回、「加西市史を読む会」を開催してきた。また、平成 24 年度からは、『播磨国風土記』の編さん 1300 年となる平成 27 年（2015）に向けて組織した加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会主催により、元国際日本文化研究センター准教授の光田和伸氏を講師に招いて「播磨国風土記講座」を開講している。平成 29 年度の同講座は、7 月～1 月で計 7 回を開講している。また、中央公民館においても、平成 25～27 年度には「地域歴史講座」、平成 26 年度からは「ふるさと加西再発見講座」を月 1 回開催している。



「ふるさと加西再発見講座」

これらの学習講座の他にも、市や民間団体等が主催となって、定期的に講演会やシンポジウムが開催されている。近年の代表的なものとしては、加西市と神戸大学との共同研究として実施した鶴野飛行場関係歴史遺産基礎調査の結果の公表を目的として開催した平成 22 年（2010）12 月のシンポジウム「鶴野飛行場関係歴史遺産活用シンポジウム」（主催：加西市）をはじめ、平成 24 年（2012）9 月の加西市史特別講演会「戦中ノ統制ト復興ノ光」（主催：加西市）、平成 25 年（2013）4 月のシンポジウム「北条節句祭りをもっと知ろう！」（主催：NPO 法人まちづくり北条）、平成 26 年（2014）5 月の「加西のかくれキリシタン」（主催：加西市野上町文化財保存会）、平成 27 年（2015）3 月の講演会「軍師官兵衛」（主催：加西郷土研究会）、などがあげられる。また、平成 27 年（2015）は終戦 70 年の節目の年にあたることから、同年 10 月には、毎年恒例で開催される鶴野平和祈念祭（主催：鶴野平和祈念の碑苑保存会）とあわせて、「戦争遺産シンポジウム」（主催：観光まちづくり協会）を開催してきた。また、同年から毎年 8 月には、鶴野飛行場展の開催とあわせて鶴野平和祈念の碑苑保存会による講演会も開催されている。平成 27 年（2015）は、『播磨国風土記』編さん 1300 年にもあたり、同年 11 月 29 日には、「風土記 5ヶ国サミット in 加西」（播磨、常陸、出雲、豊後、肥前）を開催し、能や狂言の上演やガイドツアーなどの催しと併せて、シンポジウム「風土記 5ヶ国サミット風土記の神話を考える」も開催された。



「風土記 5ヶ国サミット  
in 加西」シンポジウム



歴史ウォーク  
「みんなで歩こう」



「加西ツーデーマーチ」

## ウ 歴史ウォーク・イベント等

前述の学習講座では、座学だけでなく現地に赴くことにも力を入れており、歴史文化遺産を再発見し、歴史文化に触れる歴史ウォークなどの取り組みも数多く実施してきた。その最たるものは、観光まちづくり協会と歴史街道ボランティアガイドが主催する「ふるさと再発見ハイキング」であり、毎月 1 回程度の歴史ウォークを 10 年以上続けている。また、豊かな自然と歴史あふれる加西の良さを再確認しながら、健康づくり、体力づくりを行うことを目的として、加西市文化・観光・スポーツ課が主催する「加西ロマンの里ウォーキング」も 10 年以上の歴史を有し、平成 29 年（2017）で第 14 回を数える。また、『播磨国風土記』の編さん 1300 年に関連して平成 25 年度から始められた神鉄ハイキング「播磨国風土記 1300 年の里記念ウォーク」も継続的に行われ、平成 29 年度も「加西風

土記の里ウォーク」として、神鉄コミュニケーションズと観光まちづくり協会の主催で実施されている。その他にも、平成 25・26 年度には、中央公民館主催の歴史ウォーク「みんなで歩こう」、平成 27 年（2015）12 月には「青野原俘虜収容所開設 100 周年記念ウォーク」など、歴史文化遺産を巡るさまざまなウォーキングイベントが開催されてきた。また、平成 28 年（2016）11 月 26・27 日には、播磨国風土記ゆかりの地を歩いて巡る「加西ツーデーマーチ」を初開催し、玉丘史跡公園や五百羅漢などでは、ボランティアガイドや北条小歴史ガイド隊からの案内も実施された。また、平成 29 年度からは、加西市健康課主催の「玉丘史跡ウォーキング」も開催されているように、「加西市歩くまちづくり条例」（平成 27 年（2015）4 月施行）並びに「加西市歩くまちづくり推進計画」（平成 28 年（2016）3 月策定）に基づく取り組みの実現化に向けて、加西市の歴史文化が大きな推進力となっている。

歴史文化に関連する近年のイベントでは、「加西市播磨国風土記 1300 年祭」が第一にあげられる。平成 25 年（2013）7 月の播磨国風土記 1300 年祭事業のキックオフイベント「谷五郎とゆく！風土記の里ラジオ関西ヒストリーウォーク in 加西」を皮切りに、平成 26 年（2014）10 月のプレイベント「祭のはじまり」や同年 11 月の特別展「『播磨国風土記』と加西」など、関連する自治体と連携してさまざまな事業を展開してきた。そして、平成 27 年（2015）5 月 4・5 日には、玉丘史跡公園で「加西市播磨国風土記 1300 年祭」が開催され、『播磨国風土記』を題材にした新作能・新作狂言や加西の伝統芸能の上演、勾玉作りワークショップなどのさまざまなイベントが催された。そして、1300 年祭の終了後も、加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会を継続し、同年 11 月の「風土記 5ヶ国サミット in 加西」の開催をはじめ、前述の「播磨国風土記講座」や「加西ツーデーマーチ」の開催、後述のパンフレット類の作成など、『播磨国風土記』を活かした各種取り組みを進めている。

また、その他にも、平成 29 年（2017）で 10 回を数える北条町旧市街地を舞台に開催される「北条の宿はくらんかい」をはじめ、横尾歴史街道つどいの会による「横尾歴史街道みてあるき」、五百羅漢保存委員会・羅漢寺による「写経体験 in 五百羅漢」や「石彫り体験ワークショップ」、播磨農業高校郷土伝統文化継承クラブ（播州歌舞伎）と市内の伝統芸能団体の合同開催で行われる「ふれあい伝統芸能フェスティバル」、九会地区ふるさと創造会議・あびき湿原保存会による環境体験学習・自然観察イベントなど、歴史文化を活かしたイベントや取り組みが、さまざまな主体によって継続的に実施されてきている。



「北条の宿はくらんかい」



あびき湿原における環境体験学習・自然観察イベント



「加西市歴史街道ボランティアガイド」による案内風景

## 工 観光ガイド

加西市の観光ガイドとしては、「加西市歴史街道ボランティアガイド」が組織されている。ガイド料は無料で、北条の宿や五百羅漢や玉丘史跡公園をはじめ、山伏峠、一乗寺、鶴野飛行場跡周辺、久学寺、礒崎神社、古法華石仏、畠町歴史の森（ゆるぎ岩、鏡岩等）、亀山古墳、普光寺、東光寺、石部庚申の杜（石部神社等）、お葉つきイチョウなど、市全域にわたって幅広く観光ガイドを行っており、第 1 回ひょうご観光ボランティアガイド発表会（平成 19 年度）では奨励賞を受賞している。

また、加西市歴史街道ボランティアガイドの指導のもと、平成 17 年度より加西市立北条小学校の児童（5 年生・6 年生）が「北条小歴史ガイド隊」を結成し、五百羅漢、住吉神社、酒見寺において、加

西市を訪れる多くの人々を案内している。その活動は、前述のひょうご観光ボランティアガイド発表会において、第1回（平成19年度）は理事長賞、第7回（平成25年度）は奨励賞を受賞、また、平成27年（2015）には、加西市のサルビア賞、兵庫県のくすの木賞を受賞するとともに、優れた「地域による学校支援活動」推進にかかる文部科学大臣表彰も受けている。平成28年（2016）からは、宇仁小学校においても「宇仁っ子ふるさとガイド隊」が結成され、その取り組みは広がりを見せてきている。



「北条小歴史ガイド隊」  
による案内風景

## 才 担い手育成

前述の学習講座・講演会、歴史ウォーク・イベント、また、「北条小歴史ガイド隊」の取り組みなどは、担い手の育成にもつながる重要な取り組みといえる。

この他の担い手の育成に係る取り組みとしては、加西市に伝わる民俗行事については、東光寺追儺式及び田遊び保存会、市村子供太鼓保存会、泉子供太鼓保存会など、各地域で保存会が組織され、担い手の育成・行事の保存・継承に向けた取り組みが進められている。また、五百羅漢保存委員会では、長年にわたって受け継がれてきた石工の伝統的工法を学び、ミニ石仏づくりを体験する「石彫り体験ワークショップ」を開催、中央公民館では、平成25年（2013）に「戦争体験談語り継ぎ部養成講座」（3回）を開催するなど、イベントや講座を通じた担い手の育成にも取り組んでいる。また、観光まちづくり協会では、平成24年度に全国にふるさと加西をPRする「ふるさと加西応援団」を組織し、平成25年度には、観光まちづくり活動をしている団体や市民と触れ合い、気軽にまちづくりに関わるきっかけとするための「加西市観光まちづくり活動交流会」を開催するなど、観光面から歴史文化を活かしたまちづくりを進めるための担い手の育成に取り組んでいる。

また、『播磨国風土記』編さん1300年にあわせて、狂言師の野村萬斎氏の協力・指導のもと、平成26年（2014）に組織された「加西市こども狂言塾」は、日本の古典芸能である狂言の力を借りて、自分たちで『播磨国風土記』に記された「根日女」の物語を演じるプログラムであり、その成果は「加西市播磨国風土記1300年祭」などでも披露された。日本の伝統文化である狂言を定着させ、加西市の新たな歴史文化として育むとともに、子どもの地域への誇りや愛着の醸成も期待できる取り組みである。



「戦争体験談語り継ぎ部  
養成講座」



「加西市こども狂言塾」の  
稽古風景

## 力 情報発信

加西市では、意識啓発や担い手の育成等による保存や観光資源としての活用などに結び付けていくために、豊かな歴史文化遺産の価値や魅力をさまざまな方法で発信してきた。

加西市ホームページでは、デジタルの博物館・美術館・資料館等にあたる「加西市デジタルミュージアム」を設け、地域の有形・無形の文化財等の静止画像・動画像のデータを「美術作品」「文化財」「考古資料」「祭り・伝統行事」4つのジャンルに分けて掲載しており、平成28年度の訪問数は合計約1,400件であった。また、観光まちづくり協会のホームページ「かさい観光Navi」では、観光客向けに、テーマや季節ごとの主な観光スポットやモデルコースなどを紹介しており、重要な観光資源である歴史文化遺産の情報を数多く掲載・発信している。

また、特に『播磨国風土記』については、ホームページ「播磨国風土記の里加西」を開設して、播磨国風土記に係る歴史文化遺産の解説や各種イベント情報などの発信などを行っている。また、根日女伝承については、マンガ本『ねひめのとき～根日女伝説×『パフェちっく』～』(著者：ななじ眺)を制作するなどの取り組みも実施してきた。

パンフレット類では、加西市観光総合パンフレットをはじめ、ハイキング関係のガイドマップや個別の歴史文化遺産、歴史文化テーマごとのパンフレットなど、数多く作成・発行されており、その多くは観光まちづくり協会のホームページで取得することができる。(表2-16 参照)

これらは、Web や冊子等で広く発信され、特に、地域の人々の歴史文化に関する情報収集や学習、観光客の事前の情報収集等に活用されるものであるが、現地を訪れた人々への情報提供等についてもさまざまな取り組みが実施してきた。

その一つが歴史資料等の展示・公開である。加西市では、北条鉄道北条町駅前に位置するアスティアかさいの3階に情報機能・交流機能をもつ「ねひめホール」、3・4階に加西市立図書館を設けており、これらを利用して、平成 27 年 (2015) から毎年 8 月に開催している「鶴野飛行場展」と講演会(主催：鶴野平和祈念の碑苑保存会)、平成 28 年 (2016) 8 月の「加西の歴史資料展」(主催：加西郷土研究会)、平成 29 年 (2017) 3 月のふるさと加西フォトコンテストの写真展(主催：観光まちづくり協会)など、官民双方によるさまざまな展示等の催しが実施してきた。また、加西市旧図書館(北条町古坂)内に整備された埋蔵文化財整理室では、埋蔵文化財に係る資料や出土した遺物などを展示しており、毎年特別展も開催してきた(例：平成 26 年 (2014) 「加西市の奈良時代寺院と石仏」、平成 27 年 (2015) 「玉丘古墳と巨大長持形石棺」、平成 28 年 (2016) 「石仏信仰の歴史」)。また、平成 29 年 (2017) には古代鏡展示館(兵庫県立考古博物館加西分館)が開館し、新たな歴史文化の拠点としての活用が進められている。



古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）

また、現地における観光案内としては、北条鉄道北条町駅待合室内に設置している加西市観光案内所や前述の観光ガイドがあげられる。また、主要な歴史文化遺産への案内板の整備なども進めてきた。さらに、観光まちづくり協会では、市内観光地 10 カ所(北条町駅観光案内所、法華口駅、北条鉄道三車両、丸山総合公園管理棟、玉丘史跡公園ガイダンス施設、古法華自然公園管理棟、法華山一乗寺休憩所、五百羅漢)に無料公衆無線 LAN (Wi-Fi) を整備して、平成 29 年 (2017) 3 月から供用開始しており、今後の外国人旅行者の受け入れやログイン言語の把握などに活用するとともに、観光客の利便性の向上を図ることとしている。

表 2-16 加西市の歴史文化に係る主なパンフレット類

区分	名称	発行元
観光総合 パンフレット	加西市観光ガイドマップ	加西市観光まちづくり協会 加西市
	はじめての加西	加西市観光まちづくり協会 加西市文化遺産活用実行委員会
	北はりま みちくさマップ	加西市観光まちづくり協会他 (西脇市、加東市、多可町の観光協会等)
ハイキング・ サイクリング マップ	播磨国風土記の里 加西ハイキングマップ 加西まるごと 30 コース	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会
	鶴野飛行場跡・防空壕探検 ハイキングマップ	加西市歴史街道ボランティアガイド
	鎌倉山行者道ハイキングマップ	加西市観光まちづくり協会
	のぼってみよう北はりま 魅力満点のローカルサミット	加西市観光まちづくり協会他 (西脇市、加東市、多可町の観光協会等)
	カサイチ 加西市サイクリングマップ	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会
個別の 歴史文化遺産	かさい (五百羅漢パンフレット)	五百羅漢保存委員会
	北条石仏五百羅漢と周辺の石造物	五百羅漢保存委員会
	東光寺 田遊び・鬼会	東光寺追儺式及び田遊び保存会 加西市文化遺産活用実行委員会
	玉丘史跡公園 根日女ロマンの郷へようこそ	加西市古法華自然公園指定管理者 株式会社清光社
	古法華自然公園	加西市古法華自然公園指定管理者 株式会社清光社
	鶴野 平和祈念の碑苑 姫路海軍航空隊 川西航空機鶴野工場	鶴野平和祈念の碑苑保存会 加西市観光まちづくり協会
	兵庫県歴史的景観形成地区 西国街道北条の宿 ～京・大阪への街道～	NPO 法人まちづくり北条
	播磨の国宝を巡る	加西市観光まちづくり協会他 (小野市、加東市、加古川市の観光協会)
個別の 歴史文化テーマ	加西西国三十三ヶ所靈場めぐり	加西市観光まちづくり協会
	黒田官兵衛二十四騎のひとり 後藤又兵衛 ゆかりの地 兵庫県加西市	加西市観光まちづくり協会
	加西市と赤穂義士 ～ゆかりの地を巡る～	加西市観光まちづくり協会 加西市歴史街道ボランティアガイド
	加西に捕虜がいた頃 ～青野原収容所と世界～	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター 加西市教育委員会
	北条鉄道沿線散策マップ 北条町駅周辺 名所・旧跡 100 連発	加西市観光まちづくり協会
北条鉄道 沿線散策	北条鉄道沿線散策マップ 長駅・播磨下里駅周辺 名所・旧跡 60 連発	加西市観光まちづくり協会
	北条鉄道沿線散策マップ 網引駅・田原駅周辺 名所・旧跡 66 連発	加西市観光まちづくり協会
	加西市播磨国風土記 1300 年祭 播磨国風土記ゆかりの地マップ	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会
播磨国 風土記	加西市 播磨国風土記の里と石仏と	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会
	玉丘古墳と播磨国風土記	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会
	古代の加西と播磨国風土記 播磨国賀毛郡がみえる！古代加西の手引書	加西市播磨国風土記 1300 年祭実行委員会

## 2－4. 歴史文化を活かしたまちづくりの課題と必要な視点

加西市では、これまで多様な主体が歴史文化を活かしたさまざまな取り組みを展開してきた。しかし、人口減少や少子高齢化、ライフスタイルの変化等の社会情勢や、歴史文化に期待される機能・役割の高まりなどを背景に、潜在的に抱えてきた課題が顕著になると同時に、今後の加西市における歴史文化を活かしたまちづくりの課題も新たに生じてきた。それらの「課題」並びに課題を踏まえた「必要な視点」は、保存・活用に取り組むために必要となる各主体の意識や仕組みに関する「保存・活用のための基盤」と、保存・活用の具体的な取り組みの方法や内容、進め方に関する「歴史文化の保存・活用」の2点から、次のように整理できる。

### ア 保存・活用のための基盤

#### ～ 課　　題 ～

- ・歴史文化遺産の調査が十分に行き届いておらず、十分な情報が発信されていないため、埋もれた歴史文化遺産や市民に知られていない歴史文化遺産が数多くある。
- ・歴史文化の担い手が減少している。
- ・加西市の歴史文化の価値や魅力が、市内外に効果的に発信されておらず、認識されていない。
- ・主体間の連携が十分でなく、取り組みの効果が限定的である。

#### ～ 必要な視点 ～

- ・さまざまな主体が連携しながら、加西市に残る数多くの歴史文化遺産について継続的に調べ、それをリストアップし、市民が存在や価値を共有できるものとして公開・発信していくことが求められる。また、これまでの文化財的な価値だけでなく、まちづくりの視点からの新たな価値評価を行うことで、加西市の歴史文化の価値や魅力を再認識することが求められる。
- ・学校教育や生涯学習、多世代交流、情報発信などのさまざまな取り組みを通じて、歴史文化に対する興味・関心を高めて、自らが進んで学び、知識や技術を身に付け、保存・活用について考える等の取り組みを促し、歴史文化を大切に思う人の輪を広げていくことが求められる。
- ・市や県、国レベルの歴史的・文化的な背景から加西市の歴史文化の価値や魅力を知るとともに、各主体がより積極的な関わりをもち、調べ、知り・学び、考え、そして活かす取り組みの中に楽しみを見出すことで、加西市の歴史文化を“自分たちのもの”として、より身近に感じることが求められる。
- ・加西市の歴史文化に関わるさまざまな主体が相互に情報・知識を交換し、保存・活用の取り組みについて一緒に考え、話し合える体制づくりが求められる。
- ・加西市の歴史文化をまちづくりや観光振興に活かしていくために、その魅力を積極的に市内外に発信していくことが求められる。

### イ 歴史文化の保存・活用

#### ～ 課　　題 ～

- ・指定等を受けていない歴史文化遺産の中には、喪失の危機に瀕しているものもある。
- ・地域の活動団体に対する支援体制が十分でない。
- ・老朽化や担い手の減少が進む中で、補修・修理・修繕等に係る資金面の負担が大きい。

- ・異常気象が多発する中で、歴史文化遺産の防災体制が十分でない。
- ・歴史文化遺産と周辺環境との一体的な保存・活用の視点に欠ける。
- ・歴史文化がもつ多面的な機能を十分に活かしきれていない。

～ 必要な視点 ～

- ・地域の活動団体等の取り組みをより一層効果的なものにしていくため、また担い手が減少する中での個々の負担を軽減するため、町・区間の連携をはじめとしたさまざまな主体間の連携体制づくりや活動への支援の拡充が求められる。特に、文化財行政においては、これまでの行政主導による文化財の保護を中心とした施策から、市民主体による幅広い歴史文化遺産を守り、育み、まちづくりに活かす施策へと大きく転換することが求められており、市民主体による歴史文化遺産を活かす取り組みに対する多面的な支援を行うなど、この転換に対応した保存や支援の措置を講じていくことが求められる。また、関連部局との連携強化を図ることにより、これまで先導的に実施してきた地域の活動団体等による歴史文化を活かす取り組みのより一層の充実や、ふるさと創造会議などの地域組織を単位としたまちづくりの取り組みとの連携を促すことが求められる。
- ・加西市地域防災計画等との連携・調整を図りながら、災害予防や災害応急対策、災害復旧・復興についての考え方を整理し、各地域で歴史文化遺産の防災対策について考えるなど、歴史文化遺産の防災体制の強化を図ることが求められる。
- ・歴史文化遺産を作り立たせ、受け継がれてきた背景や歴史文化遺産相互の関係、周辺環境との関係などを踏まえて、歴史文化遺産がもつ本質的な価値を捉えた情報の発信や周辺との一体的な景観づくり等を行うことで、その魅力に磨きをかけ、観光振興等を通じた地域活力の向上を図ることが求められる。
- ・歴史文化がもつ良好な景観の形成や地域コミュニティの形成、防災の知恵、教育・学習の場などの多様な機能を使いこなして地域への誇り・愛着の醸成につなげ、良好な居住環境づくりや定住促進等に結び付けていくことが求められる。

以上の「課題」並びに「必要な視点」の整理により、「保存・活用のための基盤」については、さまざまな主体が連携しながら、「調べる」「学ぶ」「考える」取り組みを進める中に「楽しみ」を見出し、歴史文化を身近に想う人の輪を広げていくことがポイントとして整理できる。また、「歴史文化の保存・活用」については、保存・活用に必要となるソフト・ハード面での環境を「整える」こと、歴史文化遺産相互の関係や周辺環境との関係をもとに、加西市の歴史文化をより魅力的なかたちで「発信する」こと、そして、それらを「楽しみ」ながら「使いこなす」ことで、地域活力の向上に結び付けるとともに、歴史文化にさらなる磨きをかけていくことがポイントとして整理できる。

